北支

現地編輯

11 4

昭和十四年六月四日第三種郵便物認可　昭和十七年十月二十五日印刷納本
昭和十七年十一月一日發行（毎月一回一日發行）第四十二號

石佛造像の碑

第十一洞に於ける造像記、此の洞の上部の南端に九十五體の佛像と三體の菩薩を刻んだときの願文である。これによつて當時の人々の造像に對するかんがへがほゞわかるであらう。

太和七年、癸亥の歳、八月卅日に、村の信者男女五十四人が、つらつら考へてみるのに、前世の善因をつんでもならず、いま末代に生れ、甘んじて暗い境涯にとゞまつてゐる。みづから覺つたのではないけれども、わづかな善因がつもつてか聖主が佛道をもつて天下を敎へ、三寶を隆んにして、慈悲は十方にひろがり、恩澤は無限におよび、長夜のまどひから覺めさせ、永久にこの悟にひき入れようとされるのに出逢ふ。われわれは佛法の澤をかうむり、信心の心がひらけ、心からその大きなめぐみにあづかりたいと思ふが、成就できさうにもない。それでたがひにすすめあつて國家の興福のために敬しく石龕の尊像九十五體と、若干の菩薩とを造つた。ねがはくはこの功德をもつて、上は皇帝陛下、太皇太后、皇子がその德天地に合し、その威が轉輪王をこえ、みいづが四天におほひ、國祚がながくやすらかに、十方を歸伏せしめ、三寶を宣揚して永久に失墜せしめないことを。またねがはくは造像の信者一同をはじめとして、亡くなつた諸導師、七世の父母から内外の親族、その靈魂が淨土にすまひ、やすらかにすごし、安養光接して、蓮花の上に成育し、永遠に穢れたからだをすて、先生をさとり、群盲を超える、もし人、或は天人に生れるならば、あらゆる食物や衣服が意のまゝに食つたり著たりできるやうに、もしつもりつもつた殃があつて、たとへ三途に墜落するとも、ながく、八難からのがれ、ながく苦とはなれることを。

	大和朝				飛鳥時代
日本史	皇紀800年代 神功皇后三韓征伐	〃900〃 王仁來朝 仁徳天皇	〃1000〃 佛教百濟ニ入ル	〃1100〃	〃1200〃 百濟王佛像ヲ獻ズ 推古天皇 遣唐使
支那史	後漢	三國時代 八王ノ亂	五胡十六國時代	北魏 南北朝時代	隋 唐
西亞及中亞史		フン族	サツサン王朝（ペルシヤ）		
印度史		グプタ王朝		フン族諸王朝	グプタ王朝
西洋史	ローマ使節支那ニ至ル	西暦200年代 ローマ帝國の四分	〃300年代 コンスタンチン帝のローマ統一 フン族ノ歐洲侵入	〃400年代 西ローマ滅ブ 東ゴート王國建設	〃500年代 マホメツト生ル 〃600年代

雲崗石佛
開創の時代

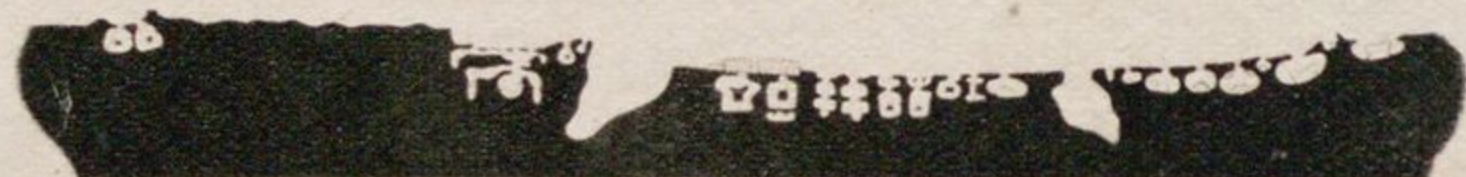
雲崗の石窟は約千五百年以前、北魏即ち鮮卑族（の拓跋部族）によつて開かれたのである。

鮮卑族はもと蒙古高原一帶を狩獵し牛羊を逐つてゐた遊牧民族であつたが相集つて一國を形成する素質は持つてゐたのである。

後漢の中頃に至るとその勢力はいまの滿洲國遼陽から甘粛省西端の敦煌まで及んで、南は漢の國境をおびやかしてゐた。

鮮卑族が平城（今の大同）に都して北魏國をうち建てるに至るまでには、もちろんその勢力に消長はあつたし、それまでには數世紀を要したのではあるが、しかし何といつても、その建國にあづかつてさいはひしたのは、中央支那に於ける漢民族の内部鬪爭であつたらう。あたかも後漢亡び、三國時代に至り、更に五胡十六國時代現出し、南北朝に至る間、骨肉相食むさ中であつたのである。

中央窟遠望

全窟斷面圖

またねがはくは同村の人々が、いまからのちは、道心日に隆んに、おこなひもきよらかで、實相をよく見ぬき、慧日を暈揚し、四流しばらく竭きて、道風つねにそよぎ、慢山くづれて、生死をとこしへに超越せしめ、佛性は明らかにして、住地にのぼらんことを。成佛しない間は、どこに生れても、常に法善智識に遇ひ、法をもつて相たのしみ、ともに進退してまじはり、たがひに相影響しあひ、つねに、菩薩の八萬諸行をおこなひ、一切を化度し、おなじく正覺をひとしくせんことをねがふ。累劫の先師、七世の父……

これから先文章が切れてゐるらしい。

北方民族が北支那に侵入し、北族國家をつくつた場合には、たいていは漢民族の農耕文化を全面的に理解することは出來なかつた。唯忠實な模倣者であり、擁護者であつたとともに、また勇敢なる破壞の役割をも演じたのである。それにもかゝはらずその興隆にあたつては、必ずその文化を攝取し、漢族の有力者などを重用して、支那風に化することにこれつとめたのである。

それからまた、當時支那と西方との交通は遠く地中海にまで及び、太武帝の太延元年（西暦四三五）には西部支那トルキスタン諸國の使節がやつて來たし、翌年には六組の修交使節を編成して各方面に派遣した。またロシヤトルキスタン、インドカシミヤ、セイロンあたりからも僧や使節が來朝してゐる。これ等西方諸國の來朝は次代文成帝の時代になるとますます盛んで、そのうちにはササン朝のペルシヤの名も見えてゐる。商業貿易も活潑に行はれたし、これによつて、西方の文物はおびたゞしく北支那に流入した。北魏の指導者の進取的な攝取態度によつて、その文化は強く北魏人に影響したのである。

北魏の佛敎藝術はさういふ西方文化と在來の魏晉文化の中から生れ出たものである。

第十八窟東壁の脇侍立像

第十八窟諸像、ギリシヤ、エヂプトあたりに見られさうな顔があるではないか

曇曜の五窟

さて和平のはじめ沙門統師賢（師賢はもとインドカシミヤの王族であつたが佛道に入り、傳教のため東行し、平城に來り、文成帝によつて沙門統に選ばれた）の死後曇曜が召されてその後をうけた。彼こそこの雲崗石窟開創の發議者であつたのである。（曇曜の身分や經歷はよく分つてゐない）

彼は帝に上奏して平城の西方、武周塞の谷あひに石窟五つをつくることを獻策した。それは邦家帝室のために、佛教國策を遂行するために。またそれは佛教をもつて、漢民族の民心收攬といふ政治的意義もあつたのである。

それがいま殘る十六洞から二十洞までの五窟である。それぞれの窟には、一つづゝの大佛を奉安し、その大きさは日本尺で四十尺から五十尺に及んでゐる。もちろんそれは太祖道武帝以下の五帝の福を祈るためである。またその五人の帝に擬したものである。

かくの如く強力なる帝室を背景として大規模な作品がつくられるからにはその形式においても一世を劃するものがあつたらう。もちろん當代第一流の石匠達が心魂を傾けたことであらう。まことにそれは期待にそむかぬものであつた。

斯くして雲崗の全窟は約半世紀のあひだに出來あがつたものである。

雲崗石佛の發見

明治三十五年伊東忠太博士によつて石佛が發見されて以來、世界の注目するところとなつた。はじめはたゞ美術的、考古學的興味だけで觀賞されてゐたに過ぎなかつたやうであるが、最近に至り、佛像學的、佛教史的に研究されるやうになり、觀照態度は更に複雜になり一層の進歩を來した。

雲崗の石佛が何故世間にかくもやかましく論議されるやうになつたのであらうか、（改造九月號「雲崗石佛寺の今昔」太田正雄氏說によれば）

一、其彫刻が美術的であること、

二、考古學的―殊に東西文明交流の歷史の上から特殊の意味を有してゐること、

三、支那に於ても佛教の空前の盛期であつた北魏佛教の精神が雲崗佛像にも形態的に表現せられてゐること、

四、從つてその佛像は佛像學の上から研究せらるべき幾多の問題を含んでゐること、

五、北魏の文化政策として佛教興隆のことが考察せらるべきこと、

などの理由をあげることができる。

第八窟東壁

第三窟、雲崗最大の佛像であり、未完成の窟である。「此の像はその面相、衣文等の形式からみて北魏時代のものと異り、恐らく隋代のものにして、煬帝がその父文帝の爲にこれをつくり其東方に母后の爲につくらんとして不虚の變により中絶の厄にかゝつたもの」關野、常盤兩博士の推論による。

菩薩立像、第十一窟

供養天人、ひざまづける姿六つ
あり、ちかごろ、人呼んで六美

北魏人の彫刻的天稟

彌勒菩薩、第十一窟西壁

石窟を開いて佛像を刻むといふことはそれまでにすでに、近くは甘肅省敦煌鳴沙山に千佛洞があり、また中央亞細亞地方には各地に石佛が存在してゐたし印度にも梵衍那國にも大きな石佛が岩壁につくられてゐたのである。だから、雲崗の開鑿にとりかゝるまでにはすでに基礎智識は持つてゐたであらう。高宗文成帝の大安年間（西暦四五五－四六〇）には、師子國の僧邪奢遣多、浮陀難提等五人のものが佛像を奉じて平城に來た。その佛像が甚だ立派だつたから、道々の諸王が工匠を遣はしてそれを臆寫せしめたが、難提のつくるところには到底及ばなかつたといふ。さういふ佛師や佛像が雲崗開鑿の師匠となりモデルとなつてゐることはたしかであらう。

拓跋族は遊牧の民ではあつたが、その頃はもう定地農耕の俗に化し、また貴人の肖像を金石で作つたといふ。佛教を奉じ佛像を見る前に、人の姿を彫刻し、鑄造する技術を獲得してゐたと察することができる。即ち人體を彫刻的に再現することは彼等にとつて何も始めてのことではない。彼等の新に經驗したことは、その異國的様式と、技術の精巧な事とに對する驚嘆であつた。彼等には彫刻美に對する認識と、それを表現するに適する天稟とが有つたのである。

白馬カンダカとの訣別、六窟三階

第十一窟外窟の佛龕

大露佛、この第二十窟は壁が壊れて内部が露出してゐるため外部から最も見易く寫眞など撮し易いために今日では雲崗の代表の如き感がある。事實また嚴然たる風貌は北魏佛の特徴をよく出してゐる。

第三窟の本尊の顔、非常に豊滿である。顔に點々と存する穴は後代の人が泥をかぶせて色を塗るための泥支へにしたものである。

大きな充實した御面相、目には大きな黒い石をはめてある、目鼻立ちとほり、耳たぶも大きい、はち切れるやうな北魏人の生活力が感ぜられるこまかい肉づけを絕した單純な面、下から盛り上る量感、それはまつたく氣魄の藝術である。あらゆるものを自己の體力の下にふみにじつた氣はひである。彼等は釋迦をかくの如く雄々しき姿において見たのであるまたその偉丈夫のすがたこそは、北族から出て北支那に君臨する獨裁君主の風貌そのものであつた。それがまた當時における純朴な北魏人の民族的なすがたであつたのである。それは西方の藝術が決してもつてゐなかつたものであるし、また魏晋藝術の亞流がたうてい創造し得なかつたものである。ここで作品全體について考へさせられることは雲崗の藝術はあとにもさきにも雲崗の藝術であつて、ほかに類例をみない、魏晋藝術に端を發したけれども、それほど神祕的なものではない、平明な、人間性のゆたかなものである、こゝでは釋迦と理想化された肉身であるこの人間性のゆたかさはもとより西方藝術の影響であるが、はるかに西方藝術を抜くものは、その量感のゆたかにして、氣魄に充ち生命の躍動してゐる點である。

雲崗の藝術が古今東西に獨步する所以である。

第五窟の脇佛

第三窟の脇佛

第十八窟の脇佛

第十八窟上部の羅漢の顏

第十八窟上部の羅漢

第六窟中央上部の脇佛

第五窟中央東壁外部に露出せる佛

第十八窟上部の羅

第九窟上窓東壁、蓮花に乘つて昇天する菩薩がある。この圖にガンダーラの色彩を最も濃厚にみる

中央窟における完備された諸天群像の完備された様式、この中央窟（第五窟から第十三窟まで）は雲崗に於ける最も整備したものであり、末期に近く完成したものである。

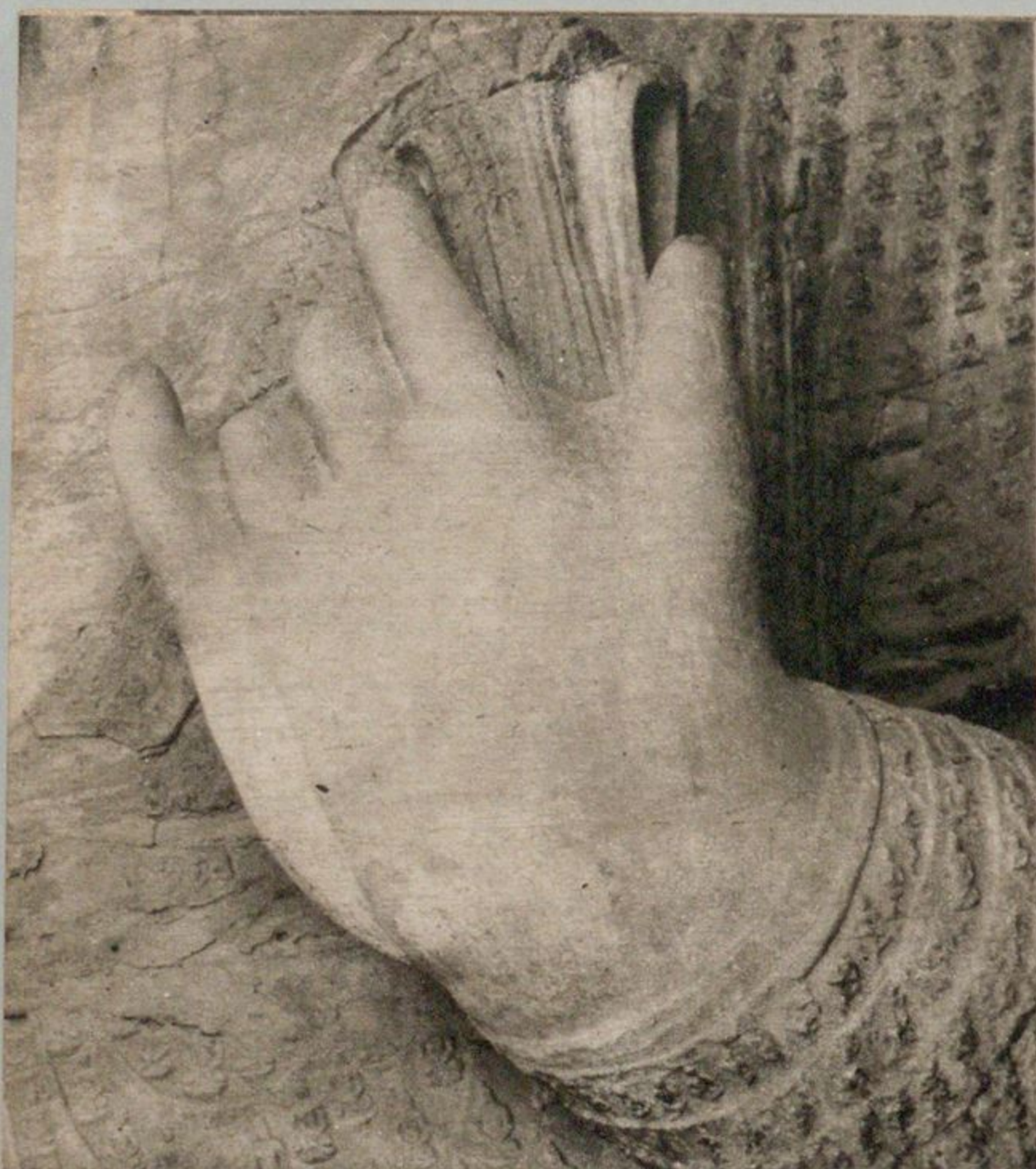
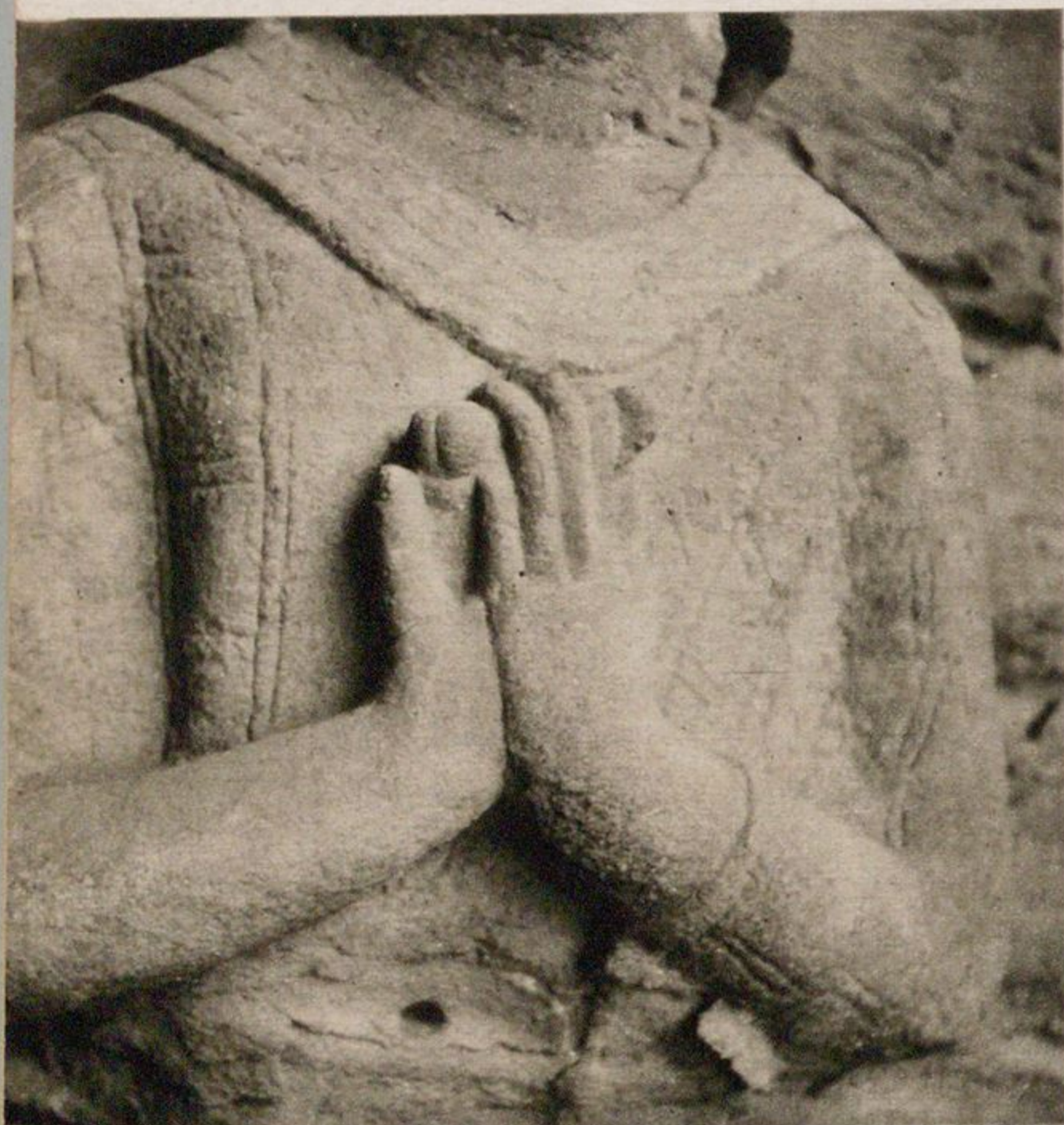
手の表情

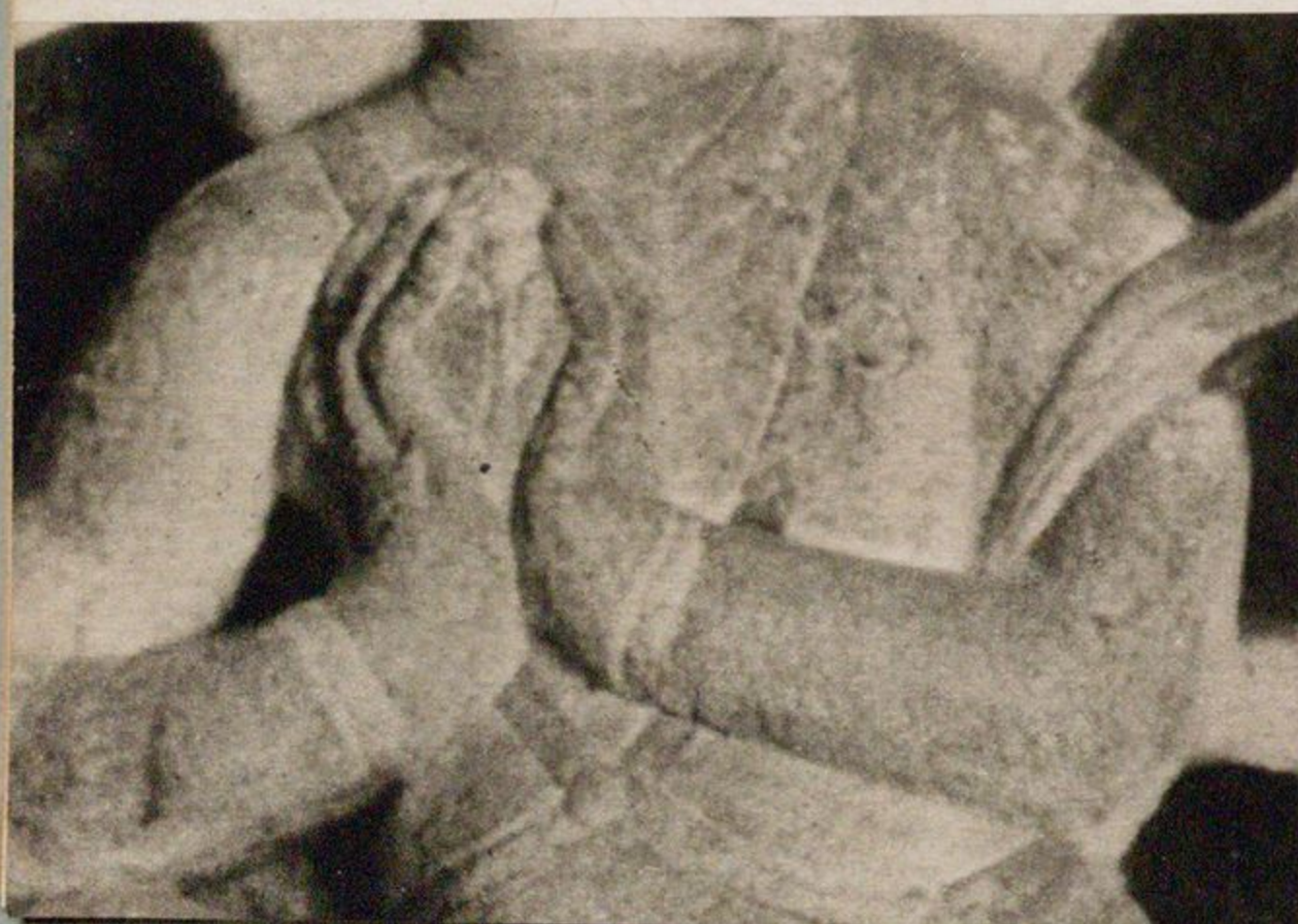
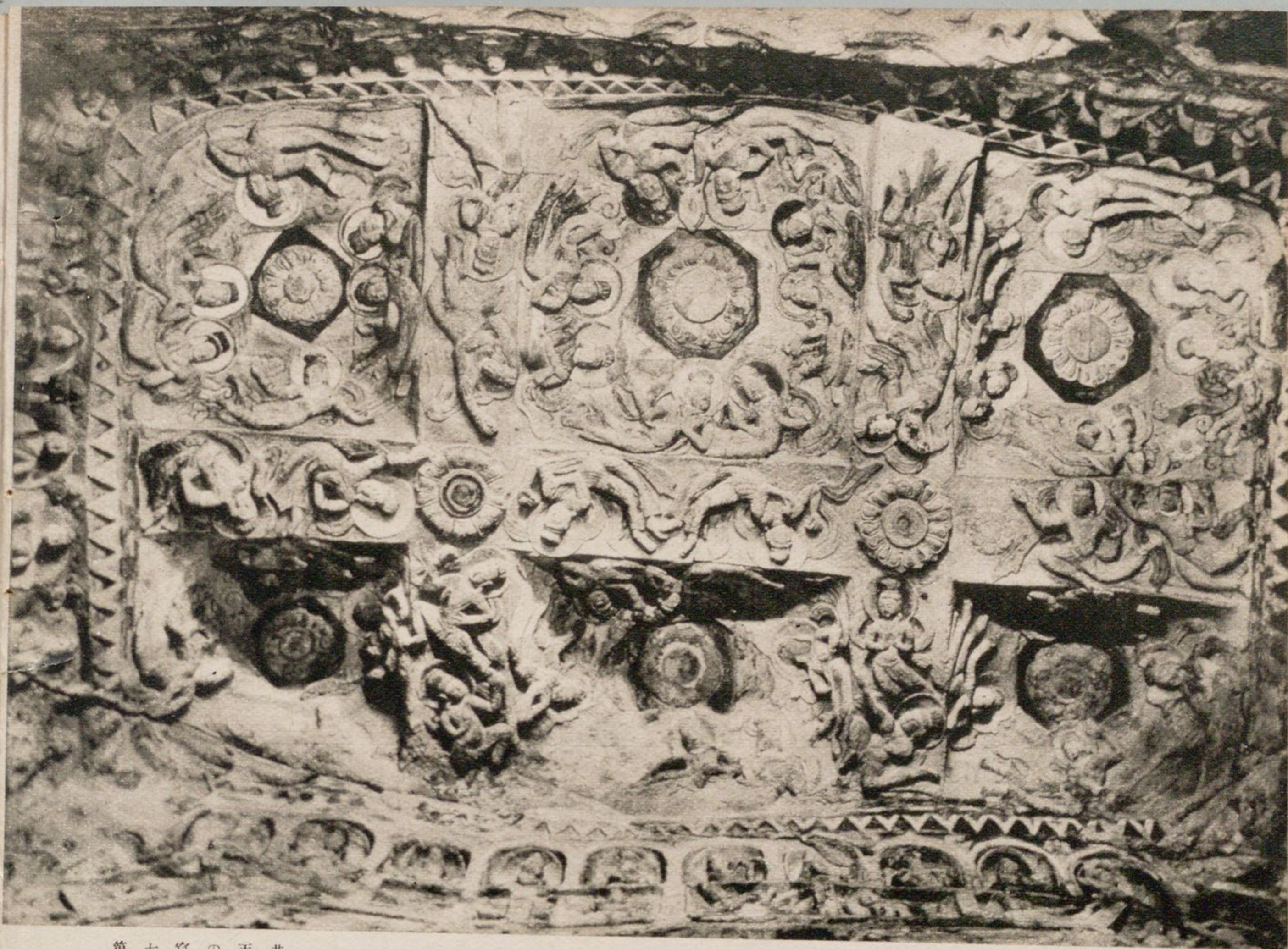
雲崗石窟のつくられたのは、わが推古佛の時代より百年以上も前のことであるが、兩者の樣式は大いに異つてゐる。雲崗のは觀念的、象徴的なところは少なく、寫生的である、だから自由藝術の觀がある。

「ブールデル、マイヨール等現代西洋の著名な彫刻家の作品に比して遜色ないものも存する」(改造九月號、太田正雄氏)

第十八窟上部の羅漢の蓮花を持てる手

第十八窟上部の羅漢の花を胸に當てる手

第八窟入口東壁にあるシバ神の葡萄を持てる手

第十八窟本尊の手、一本の指は人間より大きい

水さしを持てる手、第十八窟

第十八窟、羅漢、花を持てる手

俗称六美人の一人の手、第

第七窟の天井

飛天

天人は各洞に自由奔放に飛び交ひ、嚴然たる坐佛や立像に對してこれはよき對照をなしてゐる。飛躍する肉體の表情が寫實的に表現されてゐる。

第六窟入口天井の天女
博山爐に集ふ

第八窟入口に飛べる天女

西端窟小洞にある天女

西方の面影

第八洞入口の幅一米半ばかりの壁の東西に、一對の同一ポーズの怪神がある。東をシバ、西をビシユヌウと稱する。寫眞は、ビシユヌウである。（寫眞左）

この容貌は他の部と甚だ異るものがあり、むしろアアリヤン人種の相をしてゐる。その下部は金剛力士（寫眞右）を表現してゐるのであるが、また頗る興味ある問題を提供してゐる。その附屬物には支那的でも印度的でもないものがある。即ち頭にいたゞける翼はギリシアの神々の使ひ歩きのマーキユリイの持ちものであるし、左手に執る三叉の䂎は海の神ネプチユウンのものである、さうすると、右手の杵も金剛杵ではなく、酒神バツカスの葡萄の杵であらう。

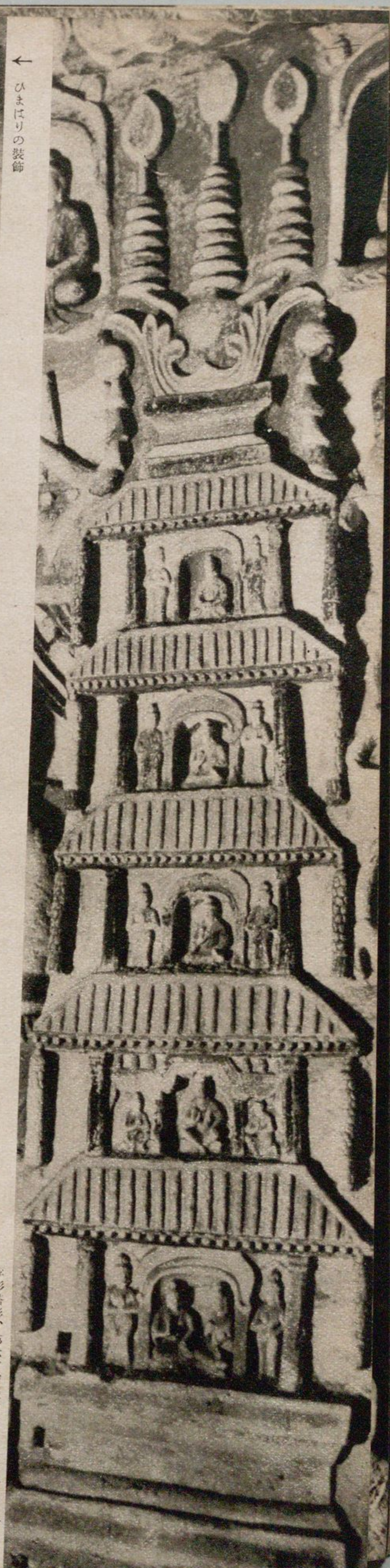
かゝるギリシアの神々の面影が傳はり來り、それが佛教彫刻と混淆したといふことは、雲崗の彫刻と西方健駄羅（ガンダラ）藝術との關係が無かつたといふことは出來ないであらう。（太田正雄氏說）

← ひまはりの裝飾

浮彫塔形、第六窟南壁、當時の建築樣式を窺ふに足る →

花繩模樣

唐草模樣

模樣

裝飾的なもので最も注目すべきは、中央の諸窟である。大きな忍冬唐草、ひまはり、蓮華唐草の如き植物題材が多い上に、ガンダーラ彫刻によく見る群童の姿が、その裝飾に結合されてゐる。この波狀唐草模樣は漢代には無かつたもので、こゝにはじめて出現し、これが南北朝から唐代にかけて東亞諸國を風靡した、まことに歴史的意義があるのである。

佛傳

第五・六洞には、中央に寶塔があつて、それを巡つて釋迦一代記が刻まれてゐる。

ルンビニ園で摩耶夫人の右脇からお釋迦樣が誕生し(第一圖)それから七步あるいて天上天下唯我獨尊ととなへ、九龍があらはれて灌頂し、象に乘つてマガダ城に歸り、人相師に人相を見てもらふ。シツダルタが、弓技にすぐれた力量を示す圖、宮中における燕飲抱擁して此世における歡樂のかぎりをつくすところ(第二圖)そろそろ遁世の意きざし、父王と對するところ、第三圖は城の四門を出て、病人や老人や死人に遭ひ、そしてつひに比丘に遭ふ、この世の無情はひしひしと若いシツダルタの胸をおそひ、つひに意を決して妃ヤシユダラ姫の就寢中、宮をぬけ出さうと思案してゐるところ、いよいよ白馬カンダカにまたがつて城門を出れば、天人は請はずして來り馬の蹄をささげ、音なく太子を空中にはこんでゆく(第四圖)さうして、山中にわけ入り白馬カンダカと別れ(九頁の寫眞參照)もろもろの修業をするのである、第五圖は、山中に於ける圖。

北魏人の佛は盧舍那佛とか大日如來のごとき抽象的なこの世の統一原理としての佛ではなく、また阿彌陀佛やその他の諸佛のごとくこの世と別な世界に屬するものではなかつた。

それはこの世に於けるシツダルタといふ肉身が發展して行く具體的な、歷史的なすがたであつて、ちやうどそれは、もろもろの修業を終へた後に眞仙

一

二

三

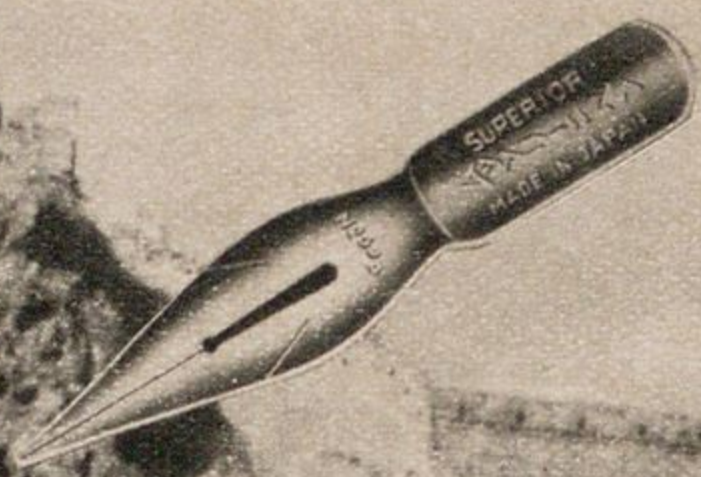
となり、昇天するやうなものであつたのである。それはこの世における人間がありがたい經典を寫し、お經をきゝ或は佛寺を起し、佛像をつくり、僧侶をうやまひ、もろもろの衆善を積んでつひに至ることの出來る境涯、それが正覺であり、佛である。彼等は佛の御弟子であり、將來は佛そのものになるのである。それで彼等は積極的にその功德をつむことに努力したのである。

四

五

無敵！國産第一位

ムッソリーニペン

スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！

—北京永定門外—

華北交通會社提供

新生國策イリヂュウム
白金ペン付

クラウン万年筆

流線型

書きよく
體裁優美
構造堅牢

多倫競馬

大阪・東京・小倉
株式會社 澤井商店

大同石佛に就いて

小野勝年

大同の石佛は、同城外を去る西北數里の一寒村雲崗鎭にある。武周川の浸蝕に依つて出來た沙岩層の斷崖を利用して營造されたもので、大規模な石窟は約二十、小佛龕に至つては殆んど無數と許してもよい。それは今を去ること約千五百年の昔、北魏の天子、文成帝から孝文帝に及ぶ三代五十年間に開鑿されたものである。

北魏は「鮮卑族の拓跋部」といつて現在の蒙古族とほゞ同一系統に屬する部族の建設した國家である。彼等は五胡十六國時代の中原の混亂に乘じて、その始めは遊牧民族に過ぎなかつたにも拘らず、短期間中に驚嘆すべき勃興を遂げ、定住國家を組織し、厚和から大同、大同から洛陽へと、その首都を發展せしめ、約百五十年に亙つて北支那に君臨した。

この石佛は勿論、當時「平城」と呼んでゐた大同に都してゐた時代に造營されたものである。而もこの造營は、前代の太武帝が道教を尊崇して佛教を徹底的に彈壓したその後を受けて着手されたものである。いはゞ排佛に對する滅罪の意味を持つたものであつた。然しながら石佛造營は、かゝる滅罪といつた單純な意味のみで行はれたものではない。こゝには更により多くの意義が藏されてゐるのである。果して然らばそも／＼如何なる意義がこの外に含まれてゐたのであらうか。

一度、石佛の前に立つて仰ぐなら、直ちに理解されるやうに、これは決してなまやさしい事業ではない。かくの如き事業は、如何に專制獨裁的時代であつたとしても、帝王個人の氣まぐれに依る道樂仕事であつたとは解釋出來ないのである。

勿論、岩石を穿つて佛像を造ることは既に佛教發祥地たる印度に於て行はれ、西域に傳へられ、此處で行はれた以前、早くも甘肅省敦煌地方でも試みられてゐる。從つて、かゝる遺蹟は印度のアジャンタ、アフガニスタンのバーミアン、或は新疆地方や敦煌において、今日なほ見ることが出來る。然し大同の石佛は、徒に當時の流行を模倣したものであるとだけで許し去る可き性質のものではない

なる程佛教は、印度に初まり、造像はギリシヤ藝術一文化の接觸に依つて生れ、西域あるひは南海を通じて支那に及んだものには相違ない。從つてこの石佛は、外觀だけでいふならば西方文化の影響で生れたものである。然しこの營造に當つて動員されたものがなければならぬであらう。

それは云ふ迄もなく漢人であつた。彼等は自己の勞力を捧げるばかりでなく、その技術を驅使し、漢文化固有の傳統を基調として、よく外來の宗教とその樣式を消化し得たものであつた。而もこれが推進力となり、實現力となつたのは北方民族の雄勁淳樸な精神でなければならない。三つの要素、即ち働くものと應ずるものと廣義の樣式とが混然と融合したところに新たなる創造が行はれたものである。

かくて大同石佛はかゝる三要素に依つて出來上つたと云ひ得る。然しこれのみでは唯成立したものゝ說明であつて、何故にかゝる事業が遂行されねば

內容

第四卷　十一月號

ならなかつたかの理由とはならない。

思ふに、新興拓跋族はより高く、より古く、而もより複雜した文化、社會等々を有する漢族を征服して、これを統御し、國家を形成しなければならなかつた。尙、武的氣象にすぐれ、武力的行動に惠まれた北族にあつては、前代以來混亂を續けて防禦力を弱めてゐた漢族を征服することは必ずしも至難なことではなかつたかも知れない。然しそれは馬上を以て征服すると云つた短期的な容易さである。これを長く支配し、統制して行くと云ふことは必ずしも容易ではない。かゝる際、征服者の側にあつては先づ民族意識を高揚し、尙武的精神を鼓吹し、固有文化に對する自覺が要求され、一面被征服者に對し宣撫を行ひ、新らしい國家組織に協力せしめるのが、普通の行き方であつた。然し、被征服者には、より古く而も複雜な樣式があり、それは征服者に對する魅惑もあり、而もこれを度外視しては被征服者の協力を得ることは殆ど至難のものであつた。

加ふるに、この際、殊に異民族の接觸や異文化の交錯が急激に行はれねばならないのである。この結果生じた幾多の混亂や矛盾は唯、民族意識を征服被征服と云つたやうな單純な形式で高揚するのみでは益々その混亂や矛盾を生ずるにとゞまる。

かくて、こゝに當然要求されなければならないのは新らしい創意に依る秩序の形成であり、指導的方向の決定である。卽ち、より高次の政治性を案出することに他ならなかつたのである。

文成帝の祖父、太武帝は佛教に大彈壓を加へて道教を崇敬したが、このことも一獨裁君主の好尙の變化に過ぎないのだと單純に片付けるわけにはゆかないであらう。しかし、この道教が如何に佛教を採用し、自家の體系を整へたものであつたとしても、當時の澎湃たる佛教信仰の潮流と、大衆佛教の體系には敵すべくもなかつたと解せられる。實に佛教信仰こそ、當時の社會に新らしい秩序を與ふべき光明であり、大乘的精神こそ高次の目標を付與するのであつた。而もこれらは徒らに高く抽象的理想にとゞまつてゐるのではなかつた。

そこで彼等支配者等は熱烈な精神力を鼓舞してその目標に近づいて行けばよかつた。何故ならばこれらのものは高次の理想を持つた道義的世界觀に加ふるに歷史的社會的な現實性を展開せしめてゐたものであつたからである。

文成帝の佛教復興の詔勅を讀むとこの間の事情がおぼろげに推測されよう。

釋迦如來はその功大千をすくひ、惠はこの世に充滿する。生死を悟るものは、その達觀を歎じ、文義を覺るものはその明晰を貴ぶ。「實に佛教は」王政の禁律を助け、仁智の善政を增益し、もろ〳〵の邪惡をしりぞけ眞のさとりを明らかにする。だから漢魏以來、これをたふとばぬものはなく、わが國もまた常にこれを尊重した。世祖太武帝は天下を統一して、その德ははるかに遠くに及び、沙門の善行あるものは遠くからやつて來た。しかしながら、山海の深きところに怪物を生ずるごとく、姦淫の徒も自然そのなかにまぎれ込んで惡事をはたらいた。

こゝを以て先帝はその有罪を誅戮しようとされたが、關係者があやまつて一律に禁斷した。亡父景穆皇帝はつねにこれをなげいてをられたが國務急で修復の遑を持たなかつた。

朕はいま大統をうけつぎ、萬邦の上に君臨するに及んで先人の志をのばし、佛道を隆んにし度いと思ふ。

雲崗の石佛はかゝる精神の下に着手されたものである。然しながらこの事に就ては直接の契機となつたものがなくてはならない。それは沙門統といひ恰も國內佛教行政總元締と云つた位置にあり、かつ天子の師として厚遇を受けてゐた名僧曇曜がゐて、石佛の開創を發議しこれを天子に實行せしめたことである。彼は曇曜などゝ稱するところから或は印度出身の僧侶のやうに解せられるが、その眞相は不明である。佛教復興の翌年、天子から召され今日の河北省定縣からはる〴〵國都に至りその絕大なる信任を得るに至つた。

斯て愈々石窟開鑿の運びとなつたものである。その年代は和平年間の初めであつた。蓋し、寺院の建立は佛教復興になくてはならぬことであつたし、造營自體が功德をつむことに他ならないと信ぜられてゐた。

一個人のみならず、一家眷族七代の先亡に至るまで等しく正覺を得ることが出來るのであつた。否、この功德を積むことに依つて、上は國家帝室のため、下は個人に至るまで、一切衆生悉く現在及び未來の幸福をこひねがふからに他ならなかつたのである。

たゞに雲崗石佛のみならず、この地にかくの如き造營が行はれるに就ては驚く可き勞力と巨額の國費とが消耗されたのであるからこの反面に人心を收攬すると云つた政治的の意味の加はつたことは、今更改めて論及するまでもない。更にうがつた考へ方をするならば、放任すれば匪賊化する虞れのある

餘剩人員を此處に吸收したものだとも云ひ得るであらう。

しかしながら、かやうな願望なり政策なりは、所詮小乘的精神を出づるものではない。それは寧ろ、方便とも考へられる可きもので、こゝにおける造營意慾には、より大なるものがあつたと思ふ。それは、謂はゞ、當時理想としてゐた世界像を具體的に示現せんとするにあつたとである。かゝる世界像が意慾せられてゐたからこそ、今日に於いて、これを目して偉大なる歴史的創造と讚嘆おくあたはざらしめるものがあるに相違ない。

足場を組んで調査中
(第十八窟本尊)

偖て、曇曜は、最初五つの石窟を開くことを建議した。そして、各々本尊を造らんとしたのである。五佛の思想は後世の密敎などの場合甚だ重要となるものであるが、當時かゝる思想傾向が重視されてこゝに五佛を現はしたものであるか否かは未だ明確でない。然し旣に首都に五級大寺を建立して五大佛を鑄造し、それを太祖平文帝以下五代の天子の冥福と供養とのためにし、同時に五人の帝そのものに擬してゐたことは文獻にも記され、ほゞ疑ひはない。かゝる例から推測して謂ゆる「曇曜五窟」が五帝に擬せられてゐることも亦、否定し得ないのであらう。この五窟は窟中何れに比定さるべきであらうか。現在の調査の結果では露大佛(元來石窟中にあつた)及びそれに續く東邊の四窟であると大體一定してゐる。

これ等五窟の本尊に對してみると或は坐せるあり、或は脚を交へてゐるものがあつて、後者の如きは明らかに菩薩形を示してゐる。即ちこゝには如來形であつても悉く、が釋迦像(現在佛)とのみ限らず、過去佛たる定光佛を現はしてゐるものもあるのではないかとさへ疑はれる。何故ならば菩薩形は明確に彌勒(未來佛)を現はしたものであつて、これらがみな意味するところは或は過去、現在、未來にあつたのではあるまいかとも解せられるからである。

果して然らば、此處においては上述の如く、俗界の統一者と、佛國土の統一者との合致が暗に意味されてゐることとなり而もそれは單一的な形態をとつてゐない點が注意されるのである。かゝる合致は、唐代において行はれた大日如來や毘盧舍那佛造營の際に働いてゐた統一思想、或は世界觀などに比較すると遙かに複雜であり、多樣であり、而も具體的であり、歴史的であつたと評し得るであらう。

これを佛敎復興者たる當の文成帝のため石窟を例にとつてみよう。この石窟とは現在、石佛寺となつて、前方に四層の樓閣を構へ、雲崗石窟の中心となつてゐるものである。これは第五第六の番號を以て呼ばれてゐるが、實に二窟で一對となつてゐるのであつて、獨立したものではない。

雲崗石窟造營の最盛期は、五十年に滿たず、その間、樣式の如きも明らかに區別があることはあつても、これは大略の前後を知るに止まつてゐる。從つてこの二窟が果して文成帝の生存中に計畫なり着手なりされたものであつたか、「曇曜の五窟」の如く、帝の崩後初めて計畫され着手されたものであらうかと云ふ問題は永遠に決定し難い。

それは兎に角、第五窟即ち東側の窟の本尊はわが奈良の大佛とほゞ同じ五丈三尺餘りの坐佛であり、これが上記の推論を誤らざるものとすれば、即ち佛陀にして而も文成帝その人であつたと云ふことが出來る。

第六窟、即ち石佛寺中眞中の窟は、中央に天井を支へてゐる方塔が現はされ、その周圍は廻廊の如くめぐつてゐる。塔の四面及び各壁面は幾多の彫刻を以てうづめられてゐる。その方塔こそ多寶塔であつて、釋迦が「法華經」換言するならば佛法を說いたとき、突如として地中より湧き、空中にとゞまつたと云ふ塔である。從つてこゝに二石佛併坐の像があるが「法華經」寶塔品に述べられてゐるやうな場面が見受

けられる。特に天井及び上層部の諸相はかゝる解釋を裏書しない迄も決して反對の論據となる可きものではない。

しかるに方塔の下部にはこの二佛併坐の造像（北）が現はされてゐるのみではなく、坐像（南）、立像（西）、交脚像（東）等があつて、それらが上にも觸れたやうな釋迦、定光、彌勒すなはち現在、過去、未來の諸佛を現はしてゐるものゝごとくにも考へられる。

しかのみならず、入口の上の所、即ち南壁の拱門の上には文殊と維摩居士の問答圖が現はされてゐる。これは述べるまでもなく「維摩經」の所説に基いてゐることを示してゐる。更にこの窟で主要な位置を占めてゐる佛傳圖に就ても一言觸れる必要があらう。そこには釋迦が摩耶夫人から生れるところ七歩あるいて天上天下唯我獨尊と唱へるところ、場面はそれからそれへと展開して、この世に於ける歡樂をつくすところ、病者老者苦者死者に逢ふところ、更に愈々出家せんとするところがある。かくて人生のあらゆる苦惱と快樂と妨害と誘惑とを超克した時、遂に偉大なる覺道に達する。しかしこの覺者と雖も若し衆生に向つて覺道を説くのでなければその意義は淺い。東壁の片隅に現はされた姿は彼が衆生の迷ひを説かんがため鹿野苑に於て初めて六説法を行はんとしてゐることである。

これによつても窺はれるやうに、石佛造營の典據となつたものは單に「法華經」とか「維摩經」とかに限られたものではなく、そこには複雜な要素が含まれてゐる。而も又、これを全部體に觀るならば、或る種の統一があることは爭ふべからざる事實だと思ふ。

特に五窟六窟を例として考へるならば、五窟に於ては佛國即國家、佛陀即帝王思想が窺はれると共に、それが六窟に於て更に生即死、世間即出世間、有無色空一如といつたところまで發展してゐるやうに考へられる。然るに一面にはさうした佛法の深淵さにもかゝはらず、何人もが容易に近づくことの出來る佛傳圖があり、一面には仕たいだけのことをした居士でありながらそのまゝ解脱してゐると云つた維摩居士が存在するのである。

自分は廣義の意味に於ける曼陀羅こそ雲崗の石窟に見られ、殊に第五第六窟はこれを合せることに依つて實に素晴しく豪莊な曼陀羅となつてゐると解したいのである。然るにかくの如き曼陀羅も、若し佛法の説明としてのみ造られたものならばそれは要するに方便以上のものではなかつたのである。

北魏人にあつては、そのことが宗教の實踐であり、道德の實踐であり、政治の實踐であつた。こゝに見るところのものは方便と云ふやうな平面的靜止的抽象的なものではなく、立體的活動的な創造であつて實に手段と目的との合致であつた。

更にたゞ佛教藝術といふ觀點からのみ觀てもいい。先づ様式に就て云ふとこゝには印度様式は云ふ迄もなく、更に西域地方の諸影響が窺はれる。而もその基調となつてゐるものは、矢張り支那的要素である。而もその手法の簡勁にして自由、而もあふれるやうな内容は如何であらう。それは理想主義的な表現と共に心憎いばかりの寫實の精神が充ち滿ちてゐる。こゝは天上のものも地上のものも共に見られる。而も感覺的なものはあつても官能的な墮落はあらはれてゐない。

雲崗は、恰も諸流を合せた大湖である。佛教藝術の源流が一應此處に集まり融合し更に諸流となつて分岐する。

龍門を初め、天龍山、さては河北山東の諸地方に及び、或は遠く朝鮮に達し我國に及んでは飛鳥、奈良朝の藝術として開花するに至るのである。然しながら此等の藝術は、要するに雲崗で既に現はれてゐる一要素の發展であるに他ならない。極言するならば佛教藝術は雲崗に於て一應完成されてゐると評しても過りではない。これ以後は全體的發展なきは勿論のこと、却て衰退の一路すら辿つてゐる。

思ふに北魏人は、かくの如き豪壯なる創造を地上に現出せしめ得たのである。曾てなかつたもの、その後も遂に企及することの出來なかつたやうな偉大なる一つの事業、否創造であつた。

もう一度石佛に對してみるがよい。そこには單に藝術的創造といふやうな言葉、偉大なる史蹟といつたやうな評言で片附けることの出來ない内容が光を放つてゐる。要言するならば歴史的世界像の創造である。

さて北魏人はかくの如く偉大なる世界像を創造し得たけれども、實際の支配は當時の世界であつた支那を統一するに至らず北支のみにとゞまつた。

それはやがて唐が興つて、世界帝國を建設するのを待たなければならなかつたのである。一面この石窟寺は北魏が洛陽に遷都してから後は漸次衰退に傾くのは止むを得なかつた。然しながら唐の中葉頃までは相當殷盛であつたことが文獻などから推察出來る。

その後、北魏と同じ北方遊民牧族出身であつてその部族的な性質を同じく

する契丹の遼朝が大同をば西京と奠めるや、また此處を保護し、尊崇し、大重修事業を行つた形跡である。このことは近時の學術的調査の結果、漸次確認されつゝあるものである。

今日、大同に殘つてゐる上下華嚴寺或は善化寺、さらに又應縣の佛宮寺等がいづれも當代の建立に係はるものであるところから推測して、それが一層裏書きされるであらう。金や元の場合は明確ではないが、明代にも、地方的な重修事業が行はれてゐると解せられる。降つて清朝に至るや、入關後間もない順治四年の重修があり、康熙帝は外蒙古遠征の歸途、わざ〳〵御駕を枉げて參拜せられたのは、彼の天祚帝が大同を後にして綏遠に到り更に西夏に身を寄せんとした際、みちすがら詣でたであらうみじめな場合と全く相違してゐた。今日も康熙帝御筆の「莊嚴法相」なる見事な四字が殘つてゐて我が世の春を親しく佛前に詣して報告し、更に國運隆昌を祈念した豪壯な意氣が覗はれる。

その後、小規模な重修があり、清末には相當蒙古人の寄進なども行はれたらしく、此處には珍らしくも蒙文の碑がある。然し旣にこの時代にあつては寺院としての生命が、わづかに中央諸窟のみに殘されてゐたのであつて、東方西方の兩窟は何れも荒廢のまゝに放任され、而も西方窟群にはこれに接近して民家が建てられ、一部分は民家としてすら利用されつゝあつた。

かくて、年代の經過と寺運の衰退とが自然的な崩壞をより早めたことは疑ふ可くもない。しかのみならず、佛像に對してその本來の意義たる禮拜の對象だに忘却し、これを藝術的對象として鑑賞せんとする歐米風潮は漸くここにも行はれることゝなつた。その結果愛玩癖は佛像の人間的破壞を伴つたことは云ふを待たない。これと共に多くの人々は何時しか寺院として對するのでなく、過去の文化的遺産として、これを史蹟と解し、或は上述のやうに藝術的鑑賞、更にまた單なる觀光の對象としてのみ考へるに至つた。

我が伊東忠太博士が最初に雲崗を紹介したと云ふことも實は「學術的發見」に他ならなかつたのである。而もかくの如き傾向は、一應中國政府當局にも遲まきながら芽生えたのであつて、その價値を認め、保護を加へんとするに至り、蔣介石の如きも曾て相當大規模な保存計畫を企てゝゐる。

支那事變に際し、わが皇軍が石佛保護に異常な努力を拂つたことは、普く人口に膾炙されてゐるところであるが、その後も引續き殊に齋藤工兵部隊の如きは、多大な勞苦をしまず參道を造作した。それ以前トラックなどは武周川の河原の南緣を行かねばならず少しの雨でも降ると全く行くことが出來なかつたものである。

昭和十三年五月、かしこくも秩父宮殿下には此處に詣でられ給うた。前日までは午後になると決つて大風が吹き向ひの丘は黃塵につゝまれてしまつたのが、この日からといふもの、全く風が止んだ。そのことが感激を以て今に想ひ出されてゐるのである。

創立間もない晉北政府が、深く雲崗の保存事業に意を傾け、晉北政廳となつてからも依然その熱意を失はず、また興亞院蒙疆連絡部がこれを援助したことも注意しなければならぬ。これ等が昨年遂に石佛保存協讃會を成立せしめ得た理由でもあつた。而もかゝる傾向は、たゞにこゝが佛教美術として世界的至寶であるといふ理解から生れたに止つてゐるのみではない。そこにはわが國の人士の間に佛教に對する深い理解があり、信仰が働いてゐるからに他ならないと考へるのである。卽ちそれは實に敬虔な宗教心から發したものである。（筆者・華北交通資業局員）

山西人を語る

林　亀　喜

山西省は華北の大平野からすれば、數千尺高い高原地帶であつて、北部から陰山山脈が西南東北の方向を執つて萬里長城の北方に並行して東北に延び東南には佛敎の靈場として多くの信徒を有する五臺山があり、又五岳の一として前淸時代までは毎年御祭のあつた恒山の山脈がある。

東南には太行山脈が河北河南の二省と境界をなし、南端に陝西省の秦嶺山脈が黄河を越えて中條山脈となつて走り、華北の大平野から山の彼方山西省を仰ぎ見れば山脈連亘して本省は山岳丘陵ばかりで平地でないことが大體想像されるであらう。

黄河は山西省と陝西省との間を流れて更に本省と河南省との省境をなしてゐるので、山西省は山脈と黄河の間に一省を形成してゐる高原地帶である。

然しながら、全省悉く山岳や丘陵であるかと云へばさうでもない、謂ゆる盆地が汾河流域にあつて沃野をなし、僅かながら水田もまたある。

盆地は土地肥沃で、主として省内の中部と南端とにある。

戸口　本省は一〇五縣で、戸口が二、一六四、四五四戸、人口は一一、四三八、八〇八人で、毎戸平均五・三人である。縣を單位とすれば、毎戸三人から四人の縣が一・四縣、一人から五人の縣が三六・五縣、一人から六人までが五九・六縣、一人から七人までが九〇縣の割合になつてゐる。

本省内で人口の最も少いのが大寧縣で、僅か一六、三七四人、最も多きは平定縣の三〇九、五六二人である。

土地面積は合計七一、四六二方里で就中、耕地面積が六〇、五八四、三二七畝となつてゐるから、丁度百分の九に當り、人口の密度は毎方里二四人になる。人口の最も稀薄な縣は永和縣で平均毎方里五人、最密の縣は長治縣で毎方里九二人、各縣中面積の最小な地方は徐溝縣で五八六方里、最大なる面積を有するは大同縣の一二・七二三方里である。

本省一〇五縣中、晋北十三縣は蒙疆政府の治下になつてゐる。

歴史的には古來、黄河文明の源泉地で謂ゆる堯舜發祥の地であるだけに、數千年の家譜を連ねて中國人の大理想とする禪讓時代から、漢民族の本家本元として二帝三王の遺民に山西人は愧ぢずと自負心タップリで、御家元振りを遺憾なく發揮してゐるのだ。

今尙、現存する名所古蹟または山河に接すれば、歴朝代々の時代が回想されて流石に山西省は古き歴史を有する漢民族發足の地であることが首肯さるるのである。

住民は約一千百五十萬人位であるが、山西省へは外省よりの移住者少く、寧ろ山西人は外省に多く散在してゐる。

家屋は外省に見ることの出來ない山西獨特の建築で穴居より進歩した建築方法がアリ〳〵と窺へる。

現在の穴居地方は、山地と丘陵地帶に多いが、此の穴居生活を續くれば、蒙古人が固定した家屋よりも水草を求めて移動の出來る「蒙古包」の味が忘れられぬ如く、穴居生活（山西人は窰と云ふ）の住み心地はなんとも名狀の出來ない快味を滿喫することが出來、夏時は涼しくして汗を知らず、冬季は暖くして寒冷を覺えず、生活様式は極めて簡單で性來質素な山西人には理想の安居である。

平地に於ける家屋も、穴居の長所を採つて合理化した建築が施され、謂ゆる窰家折衷である。

風俗は北部、中部、南部の三地方によつて異り、言語も亦自ら一地方一地方の土語があつて、容易に縣別が出來る。食物も北部と中南部とは大いに異り北部の主食物は莜麥が多い。

山岳地帶の住民は坡と峪との間に生

活してゐるのであるから、體格も他省人に劣ることは當然であり、姿勢も蟹股を多く見受ける。これは平素多年の動作が山間生活の習性となつて、自然的實生活に合理化したものであらう。

山間の農村では、可耕地に平地が少いため段々畑のみで、猫額大の斜面も耕作されて空地とてはない位に念入りに利用してある。かかる地方には馬車を通ずる廣い道もなく、只羊腸の如き小徑のみであるから農家には家畜は飼育してあるが馬車はない。作物の收穫から運搬まで馬驢騾の背に駄して地隙の細道を辿り家路を急ぐのである。從つて山手の家畜は脚の運びが平地とは異り、必ず上に高く擧げて脚下の岩石や坂道の調節をとり、歩調はおそいが用心堅固で間違はない。これに反して平地に育つた家畜は脚を眞直ぐに前方に踏み出し、歩行も極めて輕快であるが此の種の家畜は山西省の如き山坂の多いところでは氣永に馴らさねばならない。

山西人の特性　交通不便にして地上資源に惠まれざる僻鄕に育つた山西人は平地で交通便利なところに住む人の知らない苦勞がある。同じ生活でも並大抵では生存が出來ない。況して名を擧げ家を興すことは更に困難なことである。從つて爲人質素であると共に勤儉でなければならぬので、自然肩頭の勞力に生きるよりも智育を必要とする關係上、ヨリ以上の腦漿を絞つて處世の道にいそしまねばならないのだ。

然らば山西人は如何なる方途によつて貧乏省である本省を今日まで支持して來たのであらうか、それは金融業と商工業との二つの努力であつた。思慮綿密で數字に明るい山西人は、自ら理財に長ずるところから外省に出ては爲替業、即ち票莊か質屋業を營み、支那全省は勿論、北は内外蒙古より烏梁海青海又は露領に及び、南は南洋方面へも細胞的取引網を設けて金融機構が分布整備され、民族の金庫であつたと同時に清朝時代は國庫をも兼ねた全盛時代もあつた。

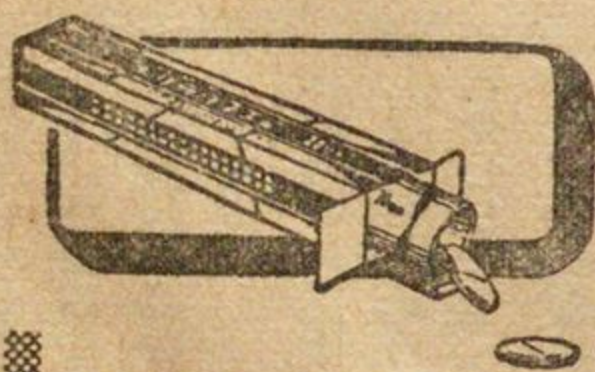
民國になつてからも、華北に於ける資本家として天津、北京は云はずもがな山東、河南の二省は勿論のこと、寧夏、新疆又は陝西、甘肅より齎らして來た現銀は太原市或は楡次太谷の金融業者に保管され謂ゆる民族金庫の保管を擔當したものである。

鐵道沿線の各村落に必ず望樓の如く黑煉瓦建ての二階又は三階の家が見受けられるのは、山西人の營む質屋の物置と思へば間違ひはない、それ程山西人は各省田舍の津々浦々に至るまで進出してゐるのである。俗に「老西兒」と稱されて、村の者よりは言語も風俗も異るから別物扱ひにされてゐるが、眼に間違ひはなく算盤もまた微に入り確かなものである。

第一次歐洲戰頃までの内外蒙古方面に於ける山西人の活躍振りは大したもので其の勢力は牢固たるものがあつた即ち内外蒙古王公の財政を料理し、金融と經濟とは山西人の獨占舞臺であつた。然るに露國の革命は『ルーブル』が不換紙幣となつたのみならず、白系露人同樣、外蒙方面から取るものも取りあへず鄕里に引上げねばならぬ狀態となつたので、命から〴〵逃げ歸つた。

要するに山西人は、大なる强靱性を有し、一度び計畫した事業にして自分一代に成らなければ、子に讓り更に孫に及びて、子々孫々家業を營みて斷つことなく、又祖先を崇拜し、子孫のためには敢て我が身を犧牲に供して厭はぬと云ふところがある。

以上は山西人の美風、良俗であるがこれが反面には、優柔不斷であると共に決斷力に乏しく洞察力がなく、從つて機を誤り保守主義に陷り易いと云ふ缺點がある。

（筆者・大倉合名會社北支代表）

山西の農業

江上利雄

山西の農業は一口に云へば高原山岳農業の一語を以て表現せられるが、山西の地形が極めて複雑な爲、自然力の影響を受けることの多い農業は地域に依つて著しくその趣を異にしてゐる。山西省は、地形的に山嶽、丘陵地、盆地の三つに分たれるが、同じ盆地でも北部の忻縣盆地は、海拔標高一千米を越えるのに、太原盆地は八百米、臨汾盆地は五百米、運城盆地は三百米前後で南下するに從ひ著しく海拔高度が低下して居り、又山嶽も丘陵地も全般的に北より南に移るに從ひ標高を急減する。從つて夏と冬の氣溫は南と北、山地と盆地とでは著しい相違を示し、北部程、又標高の高い山地程、夏期の氣溫の上昇度は低く冬の氣溫の下降は烈しい。

此の氣溫の相違が農業生産に及ぼす影響は大きい。山西省で最も作付の多い作物は小麥であるが、その大部分は中部以南殊に南部盆地に多いばかりでなく、中部以南では秋に播付けられて翌年の初夏に收穫されるのに、石太線以北の山地や忻縣盆地以北では冬の寒さが酷いので、之等の地域では小麥も春播となつて居り、作付も極めて少い。又棉花や落花生・煙草・胡麻等が中部以南の盆地に多く殊に棉花が南部の盆地に多く栽培せられ、北部には殆ど全く其の作付を見ないのは、北部や山地は氣候凉冷で棉作に不向な爲であり、燕麥馬鈴薯、亞麻、蕎麥等が北部に多く中部以南に殆どその栽培を見ないのは之等の作物が冷涼な氣候に適するからである。

山西省は純粋な黄土地域に屬し峻嶮な山嶽を除けば殆ど黄土を以て覆はれてゐる。從つて盆地河谷は云ふに及ばず、なだらかな丘陵性高原や丘陵は見事な階段畑として殆ど頂上近く迄農耕に利用せられ平原地帯に見られない景觀を呈する。之等の農耕地の大部分は栗色土壤と呼ばれる黄土の風化土壤より成るが、盆地底や河谷の耕地の土壤は、その沖積土壤が多い。黄土系の土壤は水の供給が十分な場合には著しい生産を擧げる。從つて雨の分配が良好な年には別に肥料を増さなくとも二倍三倍の收穫を齎す。支那の文化が黄土河谷に始つたのも、故なしとしない。併し乍ら山西は、中南支に比し遙に雨の少い北支平原地帯よりも更に雨が少い。平原地帯の年雨量が五、六百粍なのに山西では南部地帶で四、五百粍前後、北部地帶では三百五十粍前後の地域が多い。又省の東部は比較的雨量が多いが、西部殊に呂梁山脈の西側一帶は雨量が少い。山西省の降雨量が北支平原に比し更に少いのは夏の濕潤な大洋季節風が峻嶮な太行山脈によつて阻止せられるのと内大陸に近い丈に空氣の乾燥が甚だしい爲であり、省の西側斜面が特に少いのは大洋季節風を呂梁山脈が再度阻止するからである。

山西省の農產物の收量が平原地帶に比し低いのは此の降雨の不足によるところ少しとしない。

幸に、少い雨が夏期に集中してゐるので夏作物の生育旺盛期に水が供給せられることゝなり、夏作物の生育には好都合であるが、春より初夏の作物の播付時期に雨が乏しいために播付が出來なかつたり播いた種子が芽ばえなかつたり枯死することも少くなく、殊に丘陵の階段畑では屢々旱魃に見舞はれる。

又雨量が一般に少い年には、夏にも旱魃が襲來して農作物に著しい被害を與へることが少くない。山西に、乾燥に強い作物の栽培が多いのは、四千年來雨の不足に惱み拔いて來た農民の體驗の結果に依るもので、粟の作付が小麥の次位を占めてゐるのは、粟が乾燥に強いからであり、黍の作付が割合に多いのもさうである。乾燥勝な山腹の階段畑や降雨の少い地域程乾燥に強い作物が作られてゐる。筆者は嘗て太原の郊外の階段畑で僅々一寸五分にも充たない小麥がたつた一粒の小さな子實

山西の農夫

第一書房

新刊

東京麹町區三番町
振替東京 六四二二三

本邦唯一の原語譯

岡田正三全譯

プラトン全集

十二卷

各三圓五十錢 送二十錢 第一卷愈々出來!!

思想日本の誇るべき大業といふべき我國最初のギリシヤ語直接譯になるプラトン全集!! 譯者十五年間の苦心の結晶!! 平易明快な譯文に思想を傳ふ!!

プラトンこそは萬人の爲の思想家であり、彼の對話篇は素人の讀物とさへ言ひ得る。然し、その思想は今日叫ばれる近代の超克に於て他の如何なる哲學思想よりも我々に強い力をもつて再生してゐる!!

今月の新刊

文學博士 後藤末雄著

藝術の支那・科學の支那

(B6判 三一八頁) 二圓 送二十錢

フランス文學によつて藝術感性を研磨せる著者が科學的知性を兼備して眺めた支那文化!! 單なる紀行文に非ず支那文化への深き洞察!!

文學博士 松本文三郎著

達磨の研究

上製美本

(A5判 三二八頁) 三圓 送二十錢

これまで謎の人物であつた達磨!! 今此處に初めて人間としての實體を明らかにし、その思想的樣相は解かれた。半生を達磨研究に獻げた著者の不朽の大業!! 東洋精神の眞髓といふべき達磨の心を知れ!!

水原秋櫻子著

三代俳句鑑賞

(B6判 三二九頁) 二圓 送二十錢

現俳壇の第一人者が贈る明治・大正・昭和の代表的俳句の註釋、俳句に志す人々の是非讀まねばならぬ名著として切に御薦めします。

第一書房

新刊

東京麹町區三番町
振替東京六四二二三

◇新秋の窓邊に贈る第一書房好評新刊書◇

山崎斌編

島崎藤村文學讀本 秋冬の巻

（B6判三二八頁）　一圓五十錢　送十五錢

一世の文豪島崎藤村氏の珠玉の文字から更にその精粋を選んで成る一巻季節の移り美しき日本の美は、藤村先生の詩情溢るる眼に捕へられる時なほ美しく私たちに深い感動を起さずにはゐない。本書は自然は藝術を模倣することの事實なるを改めて私たちに教へるであらう。編者は藤村先生に最も親しき人である（既刊春夏の巻）

山田靈林著

坐禪の書 普及版

（B6判二一六頁）　一圓三十錢　送十二錢

坐禪の無限な内容を説いた最も新しい坐禪の書である。坐禪によって人生の光明を仰ぎ、現實生活の眞義に徹せんとする人々への福音書として或ひは慈味深き人生讀本としてまたるべき名著。道元禪師「辨道話」の現代語意譯は禪を修する上に必讀

★必讀の音樂書!! 文化と藝術の交流!!

原田光子著譯

天才ショパンの心

二圓三十錢　送二十錢

これはショパンの手紙である!! 輝かしい音樂を生んだ天才の心の歴史は此處に描かれてゐる!!

眞實なる女性 クララシユーマン　一圓八十錢　送十五錢

セシル・グレイ
大田黒元雄譯

音樂の現在及び將來

一圓八十錢　送十五錢

文化史的觀點から音樂の現狀を述べ更に、明日への動向を述べて本質に對する鋭き批判!!

近刊

鶴見祐輔譯

プルターク英雄傳

全四巻

第四巻・聖雄の巻　一圓五十錢

シーレー
古田保譯

英國發展史論

二圓五十錢　送二十錢

をつけて成熟してゐるのを見て驚いたことがあるが之では播いた種子さへ回收出來ないし、又刈取りも出來はしない。

旱魃の年には、斯うして收穫皆無になる畑も少なくない。

山西では雨は肥料以上であり、否穀物であり金であり從つて農民の命の糧である。

山東省には、「雨は油より貴い」と云ふ諺があるが、山西省では油どころの比ではあるまい。

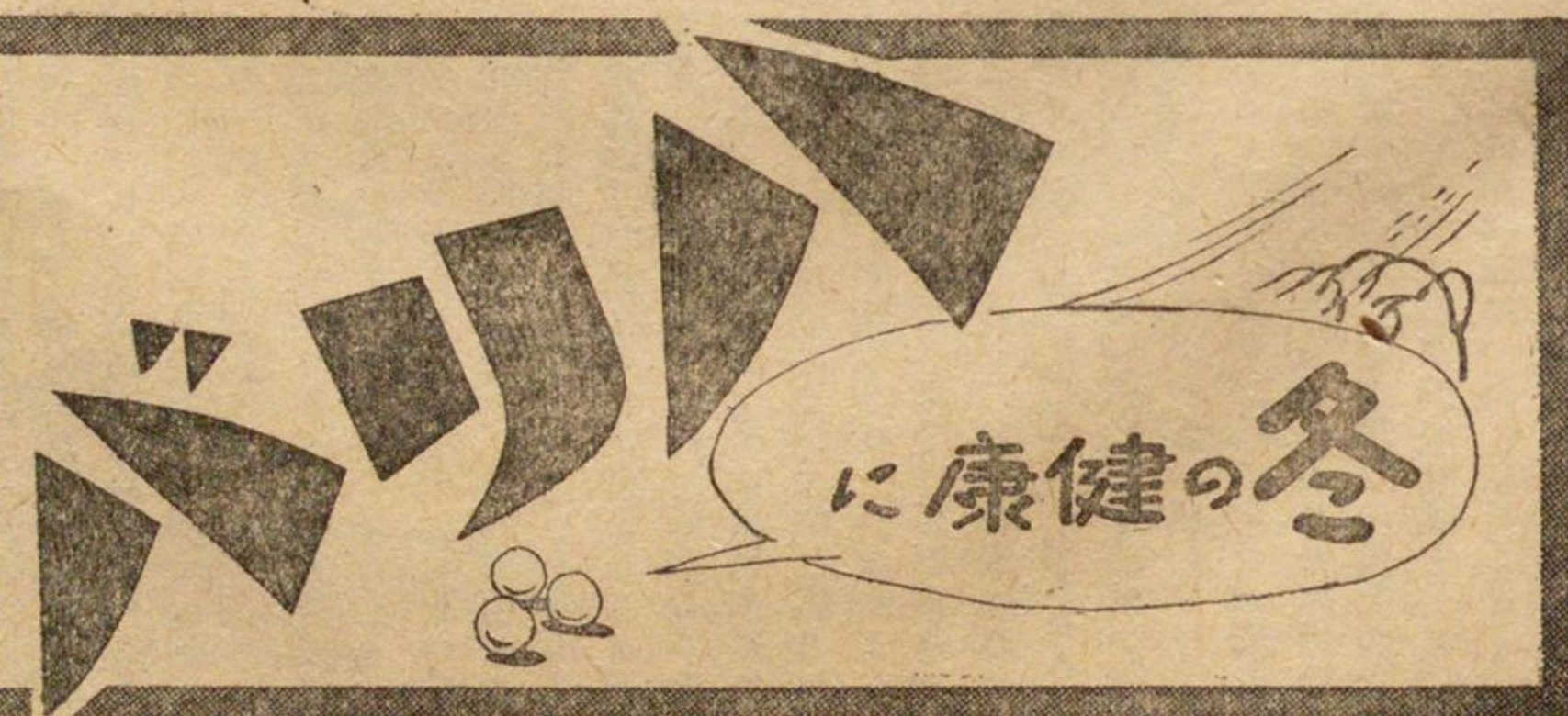
斯くて山西の農業生産には人工灌漑が極めて大きな意義を持つ。農民達は雨の不足を補ふ爲に、山麓の湧泉は申すに及ばず、地下水の高い所では井戸を掘り、河水の引ける所では河水を、農民の技術と資力の許す限りに於て利用し、小麥、粟、棉花、罌粟、蔬菜等に灌漑してゐる。

山西にそこばくの米が生産せられるのも湧水や河水の豐富な所では水田もつくり得るからであり、太原郊外の有名な晉祠鎭の神泉は、よく千五百町歩の水田を潤すに足る清水を絶間なく湧出して居り、玆では蓮の栽培も少くない。

併し、山西の畑地は丘陵や山腹の階段畑が極めて多く又黄土の土層が厚い爲に井戸も掘れず、河水も湧水も利用出來ない畑が大部分である。灌漑せられてゐる耕地は水田をも含めて總耕地の六%を出でない。從つて灌漑出來ない畑では天然の降雨を一滴も逃さじと畑の周圍に畦をつくり或は畑の中に穴を掘り、消極的な水分保持が講ぜられてはゐるが自然の力には抗すべくもなく、降雨に惠れない山西の農民は常に旱魃の危險に曝され、その顏色迄が乾燥しきつた黄土色を呈してゐる。水々しいと云ふ言葉は山西では滅多に使ふ機會がない。

無味乾燥な駄辯を弄して紙數を使ひ果しさうになつたので、最後に水々しい山西の果物語りを附記して本稿を終へることゝする。

山西にも一通りの果物はある。苹果、桃、梨、杏、李、葡萄、柿、棗がその主なるものである。尙果物ではないが嘗ては天津港から遠く歐米に迄輸出せられた核桃は山西特産の一つで有名な産地として知られてゐる。

果樹は妙なものであの甘美な果實をつけるにも不拘一般に乾燥地を好み、乾燥地の果物程味がよい。だから乾燥地の山西の果物には仲々上等のものが多く、殊に葡萄と杏とはその良質と豐産とを以て知られて居り、清源縣の葡萄の如きは歐洲葡萄に劣らない甘美と芳香とを持つて居る。日本の葡萄等はその足許にも寄りつけない。又北支の柿は日本の柿に劣ると云はれてゐるが山西南部の小型の柿は之又良質で極めて美味であり敢てひけをとるとは思はれない。

苹果、桃、梨は中北部、葡萄は中部、李は中西部、核桃は東部山地、柿は南部にその主産地があり棗と杏とは南より北迄廣く分布してゐる。

尙産量は少いが、楡次の西瓜はその昔、河北省の徐水縣の白菜と共に清朝皇帝への獻上品となつてゐたと云はれてゐるので其の味は又格別であらうと思はれるが之はまだ試食したことがないので保證の限りではない。

山西の農業に就ては語るべき多くの問題が殘されてゐる。だが山西農業の特徴はそれが特に自然力に支配せられてゐる點に見られる。耕して天に至る態の極度の耕地利用にも不拘、山西の農民が徒に十年九旱の苦惱を嘗め農家經濟が窮乏化の一途を辿つてゐるのも之が爲である。

山西農業の振興は科學的技術と資本の投下による自然的制約の克服なしには望めない。（筆者・華北交通資業局員）

冬の健康にハリバ
大陸の酷寒季に備へ
頑健な體力の培養に
毎日ハリバで多量の
脂肪性榮養の補給を
百粒・五百粒
田邊公司

山西水談議

大平正美

石太線によつて見渡す限りの河北平野を西行すると、やがて行手には南北に走る大行山脈の峻嶮が横たはる。唐代の女將軍、平陽公主が屯したといふ娘子關を越えると、愈々山西省境に入る。鐵道は淸冽な溪流に沿ひ、重疊巍峩たる山嶺を縫つて更に西走する。

こゝに車中の旅人は宛も木曾山峽を行くが如き風致に目を娯しましむるであらうが、この山々の頂まで綺麗に段々畑の開墾せられて何か作物の植付けられてゐるのを見るであらう。若し北支名物の蒙古風が漸くなくなる六月初麥秋の頃にこの沿線を通るとするならば、例年は此等の山上の耕地には僅か四五寸にも達せぬ小麥が全然穗もつけずに立枯れの樣子で黄色く乾き切つてゐるのを見るに違ひない。

人々は何故にこんな水利の絕無に等しい土地まで貴重な種を蒔かねばならぬかとの疑問を抱くと共に、よくもこんな山の上まで耕地として開いたもんだと、その根氣の良さ、勤勞を惜まぬ支那農民の姿に感心させられる。

山西省は、地形から云へば平地に惠まれず可耕面積が狹少な土地柄からして極度に土地を利用してゐることは分るが、あの黄色くなつた農作物を見ると、彼等農民のために何とか水利灌漑の方法はないものかと考へざるを得ない。水の少いのは單に山地ばかりではない、大行山脈の西側の黄土地層の耕地でも同樣である。農民は僅かに自然の雨水が順調に降り注いで作物を育て上げて吳れることをのみ祈願しつゝ耕作してゐるのである。支那の四五月は殆んど雨に見舞はれぬといふ自然傾向を熟知しながらも、萬一の僥倖にでも雨に惠まれたならばとの淡い希望に縋るのみである。論より證據、大行山脈中でさへ河沿ひの帶狀の畑だけは麥も野菜も青々としてゐる。要するに問題は水である。

現下、華北に於ける食糧增產對策として鑿井工事が提上げられ官民一致着着實施せられてゐる。水利灌漑改良の問題は、全華北を通じての懸案ではあるが山西省に於ては事變前山西の王者閻錫山は山西經濟の立直し策として省を單位とする自給自足政策を樹立し、謂ゆる山西建設十年計畫を發表したがこの計畫案中にも鑿井の必要に着目し當時太原にあつた晋綏、綏靖公署の內に山西鑿井局といふ役所を設置し、水は地方開發、民利增進のための切實なる要求であるとの宗旨から、全省百五縣（現在の山西省は九十二縣）に十萬眼の鑿井を目標として、その經費三億圓は、省縣政府が各々一億圓を支出し人民賦役によつて一億圓に當る勤勞奉仕を以てする計畫を發表し、鑿井局の機構を確立し、鑿井機械資材等の購入に着手し、その事業は正に緖に就かんとして支那事變の勃發に遭會したのであつた。

斯の如く述べて來ると山西省には全然水も河も無い樣に聞えるが、面積十七萬平方粁、臺灣の約五倍に近い廣大な地域である。黄河もあれば汾河もあり、無數の河川が縱横に流れてゐる。但し農耕に利用し得る河水は到つて少ないのである。また水の豐富な特殊地帶も無いではない。早い話が山西東境の關門、娘子關の部落近くには事變初めの頃、この地に奮戰した鯉登部隊長の名に因んで鯉登の瀧と命名せられた大きな瀧が懸つてゐる。數十尺の飛瀑は北支には珍らしく車窓の眺めとしても絕佳である。この瀧の水源は泉である。この流水は下流で或は水車に、或は灌漑に利用せられてゐるが、惜むらくは、山西省域內では用をなしてゐない。

更に玆に紹介に價する水境がある。太原を距る西南六邦里の近郊に惠は三晋に洽しと稱せられる晋祠鎭の靈泉がある。この泉は山西には珍らしくも淸らかな湧水が晝夜を分たず滾々として流れ出し、附近數十個村の農民の生活の基礎となつて、如何なる年にも旱魃を知らぬ水鄕である。從つて以前から謂ゆる晋祠米と呼ばれる米の產地として有名であり又果樹殊に葡萄の名產地として知られてゐる。此等は皆こゝの泉の水の賜物なのである。

元來、支那では水と云へば直ぐ黄河の氾濫を想起する樣に水禍の慘狀を恐れしめるのである。故に反面からすれば治水は治國の第一義なりとさへ考へ來つたものである。然るに此地では、水は親しむべきものとして泉の神を祀り三晋數百萬の蒼民の信仰を集めてゐる。この晋祠祭は、三國の武將、關羽を祀る解縣の關帝廟、春秋の孝子介之推を祀る綿山の介廟祭と共に山西三大廟祭の一として每年舊曆七月麥秋を神に感謝するため盛大に執り行はれるのであつて、山西省民の水に對する敬虔さの一端を窺ふに足る。

次に角度を改めて別の觀點から山西の水を取扱つてみよう。

旅人を乘せた列車は石門から十時間の山道を幾度かの給水によつて山西省の首都太原市に到着した。こんな山又山の奧の町だから大した事もあるまいと思ひ勝であるが、それこそ認識不足といふもので、閻錫山の拮据二十年の成果は、今や皇軍の管理の下に移され太原は近代工業施設を備へた城市として北支には特異な存在である。城北一帶は工業區を形成し、林立せる無數の煙突からは、黑煙が濛々と上つてゐる。確に大行山脈の西側にこんな都市が發達したことは驚異である。然し、ここにもまた工業生產企業に重大なる惱みがある。卽ち工業立地から見た水の問題である。玆に之等工場中の代表的であり、且つ重工業部門の花形として活動する太原鐵廠について見ることゝしよう。

太原郊外の最も北に位する鐵廠は獨逸人技師の設計になり、支那事變直前までに既に八割程度の建設を終了してゐたが、此の鐵廠の用水の獲得には頭を痛めたもので、現在の位地に敷地を設定したのもこの用水關係より決定せられたものであつた。最初獨逸人技師の手により鑿井に當つたが水脈を探し當て得ず、次に上海の米系鑿井專門會社から派遣された米人技師によつて再着手せられたがこれまた見事失敗に歸してしまつた。最後に登場したのが日本人技師であつた。此の人は事變後も再び太原に活躍中であるが同技師の苦心努力の結果によつて五眼の井戸の鑿掘りに成功した。この水あつてこそ鐵廠の操業は可能となり、今日朝夕天を焦す熔鑛爐の火焰はこの水によつてこそ燃え上つたと云ひ得る。

更にこの技師についての挿話を語りたい。彼が山西に來たのは昭和十一年春のことで、先に述べた山西鑿井局の一員として省政府から招聘せられ局長に次ぐ地位を與へられ、支那の陸軍大佐の待遇を受けた。當時太原に存在する邦人は二十餘名の僅かであつたが、支那側からは色々な制肘壓迫を蒙り特に居住に就ては住居の獲得に最も困難を極めた狀態で大變難儀な目に遭はされてゐた頃であつたが、この技師だけは山西省政府から望まれて鑿井技術の指導者として招聘せられて來たのであるから住居は支那側から提供せられ、役所の内部でも仲々威張つたものであつた。

斯くて彼は此の宿舍に起居すること一年半、その間家族さへ呼んで不自由なく暮してゐた。翌年七月七日、蘆溝橋事件の勃發後も山西省政府では貴下の身柄に就ては絕對に責任を持つて萬全を期するから安心して仕事に當つて吳れと申し出て來たが、愈々狀勢逼迫して引揚げと決するに及んで、他の太原在留邦人の多くは監禁同樣に送還されたに拘らず、此の技師夫妻だけは山西省政府から太原大同間を自家用車によつて安全に送り屆けられたのであつた。

斯の如く、水に關係ある日本人は最後まで好意を受けてゐた。

今度は太原市内を步いて水に關する話を市井の巷に拾ひ上げてみよう。

最近は太原にも上水道が完成して水の問題は壹部解決した樣であるが、それでも一般家庭では買水乃至は自家井戸水によつてゐる。大概の井戸水は硬度が高いから色々の不便が起る。こんな水で頭髮でも洗はうものならそれこそ糊でもつけた樣にベト〳〵と石鹼が固まつて手のつけやうがなくなる。また新らしく太原に在住する樣な人は大概下痢を起し、中には一ヶ月以上も腹が軟くなつて身體の調子の整はぬ人もある。

太原の水は硫酸マグネシユームを多量含んでゐるからこの水を呑むことは下劑をかけると同一效果があるのである。それで市内の井戸は甜水井と苦水井の二つに區別せられ、買水の値段も違つてゐる。甜水といふのは硬度の低い水で、苦水とは硬度が高く味覺にさへ覺知出來るものも少くない。この甜水でさへ一〇—三〇度位であるから、決して理想的の飲用水ではない。但し呑み慣れると身體に障る事はないとされてゐる。桶一架幾何と値段をつけられると、日本でいふ湯水の如くには水を使ひ得ない。

筆者も太原には長く住んでゐた者であるが、時々新民公園に散步する。これは太原市内唯一の遊園地であるが、園内には大道床屋が店といつても單に天秤棒に理髮洗面用具を擔いで來る程度のものである。時々鐵製の共鳴器型の鳴り物をビーン、ビーンと鳴らして客を呼ぶ。

或の日のこと一人の床屋をとらへて聞いてみた。

「理髮は幾何かね」

「髮を刈つて額を剃つて三十錢です」

「額剃りだけなら？」

「二十錢」

額剃りだけが二十錢とは、あまり値段に差がなさ過ぎると思つたので、二十錢とは少し高いではないかと野次ると、床屋は別に高くない、何の不思議があるかと云つた顏で

「髮を刈つて額を剃つても一度洗へば結構です。また額剃りだけでも一度は洗ひます。水を使ふ量は同じですからね」

床屋の頭を洗ふ水の使用量が理髮料金決定の基礎であるとは、日本人には一寸氣附かぬところである。

（筆者・華北交通資業局員）

さくらフヰルム

躍進日本の代表的フヰルム

一般用に　スペシアルクローム

戶外用に　パンクロF

夜間用に　パンクロUSS

京山線沿線地理景觀（二）

（八月號より續く）

小林倍一郎

廊坊、北京間では、西に永定河を控へ、古くはその扇狀地堆積を受けた地區であるため、間々砂地を見る。その砂地を利用して、黄村や廊坊の果樹栽培が行はれてゐるが、時には砂の丘列を形成してゐるのが見られる。尤も更に北京に近い豐臺附近では、苺、トマト、人參、其他蔬菜類の栽培を見る。これは砂質の壤土で、地下水面近く、――第三期末と思はれる赤色土層が、北京附近の不透水層を形成してゐるがそれよりもずつと上方の淺い帶水層の一つは、この附近で地表に達するものと思はれる。このために地表にアルカリ分の白い晶出が示される――灌漑用井が掘り易きことなどの條件に、更にその收穫物の需要者であり、且つその肥料――人肥、灰塵の供給者である北京が近いといふことに由來するのは勿論のことである。

これに對し天津―塘沽―蘆臺附近とその北部には七里海や薊運河下流などの如き沼澤地から、濱海の低窪地があつて、自然的には葦の叢生に委ねられて、アムペラや製紙の原料を提供してゐるが、四千年の土の子は少しでもより多く耕さうと努力して、兩側から盛土した畑を作り、その間の水濠により排水とアルカリ分の洗脱を試みてゐる。これは近頃になつてその大分が棉花の生産に充てられるに至つた。

又、濱海低窪性のアルカリ地帶は、淡水の灌漑を得られる限り稻作には差支へなく、却て一二年の稻作は地表部を洗脱して、高粱などの一年位の間作さへ適する樣になることを知つた彼等は、明代には大沽の南西方に當る小站附近に、水田開墾を試みて成功したのである。そしてこの條件は興亜の食糧問題にも寄與する意味に於て、日本側では事變前より注目され、今では軍粮城附近や茶淀附近の農場が開かれるに至つたのである。

茶淀の新らしい水田と家や、新河―軍粮城間の平和さうで水に惠まれた農村が、車窓に目を惹くであらう。

たゞ天津に近い地方では、前述北京でも述べた樣な需給關係から、蔬菜の栽培を見るのは型の如くであつて、張貴莊附近の白菜收穫の頃の風景は柳の黄葉の下に於て美しいものである。又、新河の對岸には、海河の岸近く――自然堤防地帶に、桃や杏の栽培を見るのも土地利用の上から見て面白い。

この低窪地帶は必然氾濫に見舞はれる運命にあり、殊に永定河の三角淀デルタの東南部を受ける天津―楊村間は殆んど夏毎に災される。併し元來永定河の水は、三角淀内より鐵道を越えて東方の塌河淀に誘導して、沈泥せしめ然る後、天津の下流に清澄水を送ることになつてゐるが、或は北運河或は龍河や鳳河の滯流を來すので、附近の畑は忽ち大湖水に變化する。

併しこの氾濫が新らしい土壤を殘して退却すれば、農夫は昨日までの慘苦は全く忘れた樣な顏をして、營々として再び耕耘に着手する。只、この氾濫がなるだけ早期に來ることを願ふまでである。後れると作物の生長時間が不足するからである。そしてこれが順調に運ばれたら、一水一麥の利と云つてまづ〳〵喜ぶ方である。

同樣の氾濫は、海河下流の天津縣、薊運河流域の豐潤、寧河縣附近にも屢々である。雨の多い年の夏に此の地方を旅行する者は、時に列車が漾々たる水域の中を走ることを異樣に感ずるであらう。そして天井の落ちた泥の家を尙去りかねる難民が、破舟に依つて流木草根を拾ひ集め、破網と簗とによつて露命のために小魚を索むる樣子には誰しも漢民族の生活力の强さに慄然たるものを感ずるであらう。

尙この低窪地帶と海濱にかけては、漁業と製鹽が面白い景觀を形成する。漁業は內陸の水系からは、簗や手網で海岸では濱邊や淺瀨で、流し網や張り網など諸種の方法によつて撈られる。

この地方で獲られる魚介、蝦、蟹は年產額一萬五千噸（東部を含めて）よりも下らぬと思はれる。そこで秦皇島や北戴河の外、漁家堡（塘沽）北塘、漢沽、蘆臺、黒沿子、神堂、大淸河、南北堡、洋河口などの小漁港が發生した。

製鹽業は、その泥濱であること（天日鹽田の結晶池床はよく練られて彈力あるゴムの樣な粘土で鋪裝される）土地が緩傾斜といふより平坦に近いために、海水の誘導は風車の利用と共に容易であること、夏雨期の集中による晴天日數多く、夏季日照時間の長いこと、濕度低く乾燥强きことなど自然的な條件に惠れてゐる外、近世になつて更に外人の技術の影響――イタリアあたりの地中海の製鹽法―に依つて刺戟されこれが長蘆鹽の名に依つて天下に喧傳されるに至つたものである。

明朝の初期には山海關以西、滄州までの海濱に鹽場二十四を算へたと云はれる。而も附近は不毛の地であつたし灤河デルタや鹽山縣（海河口以南）の濱海地帶は、海賊の巢窟であつたので流民、匪賊の私鹽場が擴げられて行つた。併し、その後整理もされ、目下蘆臺（蘆臺、漢沽附近）豐財（塘沽、鄧沽附近）の二鹽場となり、事變前年產○○餘萬噸を擧げてゐたが、華北鹽業公司の手により將來舊鹽場の復舊や新場の開發が計劃されてゐるので、それが完成したら、中國の民需に應ずるばかりでなく、日本への輸出品として重要な意義あるものであることは云ふ迄もないが、これが加工業としての曹達、洗製、精鹽が、漢沽と塘沽に興つたとは、燃料（開灤炭）の利便によることながら、この濱海低窪地帶の地域性に根ざす一景觀である。

本地區の河川は甚だしく曲流する不便はあつても、殆んどすべて舟を通ずる。薊運河は樹枝の如き河系を蘆臺―北塘地方に集め、その東、豐臺以下の下流部は、小汽船さへ航行可能な水深を持つてゐる。從つて河口に近い北塘は、天津外港として塘沽が施設される以前は、それをも凌ぐほど民船貿易に榮えたものである。

即ち、渤海の民船貿易を北塘背後の樹枝狀水路と結べば、西は京津に通じ、更に北方熱河方面との謂ゆる長城線貿易とも、水路末梢部に近いマーケットを通じて連絡されてゐたのである。

併し今では京山線の鐵橋は、北塘から內水への連絡を妨げて、北塘のさびれは塘沽繁榮の逆示數となつた。

海河（白河の天津より下流を云ふ）は、北支經濟の心臟天津の食道であり歐米資本主義の軍道として重要であつた。その曲流は幾つか掘割られて水路の短縮と潮差の增大―河道の洗澱浚渫

「が計られ、又浚渫船による円洲及び河道の浚渫や碎氷、永定河泥沙の沈澱池放流、新開河や潮白河李遂鎭の水閘による水量節理、分流の設閘と堤防補修による水位の保持など、忙はしく改良された。併し開發され行く北支の食道としては、やはり細きに過ぎ、新港の築設と、陸上運輸のより大なる協力は必須となつた。たゞ河口に近い塘沽附近では、大きくS字に曲流した部分が、埠頭延長を大ならしめるために利用され、その曲流の『袖』の上に塘沽の街は占居し、大沽はその下流側對岸の『袖』を占めてゐる。

上述、海河の外に、鐵道と競走する運河が三つあげられる。唐山、蘆臺間の煤運河、天津より通州に通ずる北運河、天津より蘆臺に通ずる蘆臺運河であるが、後者は一部水路不良て、目下途中より金鐘河により北塘に通じてゐる。これは東河と略稱され、東からの棉（東河棉とよび大陸棉を主として北支で最も良質である）雜穀、石炭、アムペラ、西からの雜貨、麥粉、布類などが運ばれる。

煤運河は、鐵路開通以前に開灤炭田の石炭を塘沽、天津方面へ運ぶために開かれたものであつた、今でも石炭、雜穀、麥粉など、重要物資の輸送上、輕視出來ない。そしてこれが列車の北窓に近く並走する風景は、交通機關の新と舊、水と陸の對照そのものといふ意味で面白い。而も沿岸の農民はこれに灌漑水を求めて、略〻一定の間隔に手廻しの龍骨車を仕掛けてゐるのを見れば、支那農業書の一頁を讀む感がある。

北運河は、揚村で鐵橋により交叉するものであるが、沿岸の棉（北河棉と呼ぶ）などを天津へ運ぶのには有力な鐵道の競爭者であるが、民國二十二年李遂鎭の決潰以來、潮白河の水量調節効を失ひ、揚村附近の河道亦流量面積を狹めて、昔日の如く盛でない。

尙、この北運河を含む海河系に子牙河、大淸河、南運河、新開河などの諸水路が蝟集合流する地點として、天津の占める內陸交通上に於ける位置は誠に優れてゐると云はねばならぬ。

宋、元頃より既に砦が設けられ、殊に元には大都北京の南方に當り、可なりの舟泊地として榮えたものゝ如く、北運、南運、蘆臺の三水相會する三岔口の南岸の自然堤防上に發生したものが、明の設衞築城（天津衞と稱した）以後、漸く都市の形態を生じたが、何と云つても天津を飛躍させたのは、英佛聯合軍の北京攻略に結ばれた天津條約による開港と、北淸事變後の外國租界設置であつた。

由來、北支の商業、金融の中心となり、漸次紡績、綿布、製粉、製陶、化學工業（ゴム、マツチ、製紙）等の諸工業も發達して來た。かくて西部は、多様な丘陵と、美しい海岸とを持つた東部の地域に比すれば、總じて華北平原の文化型となる。

殊に面白いのは、その住居である。東部では平房子ではあるが、丘陵地には石の利用が多く、また大白や石灰が多く壁や屋根は灰土が塗られて、灰色であり、毎夏加へられる屋根の裂け目の修理が白く模樣を描いてゐる。併し西部に來ると、都會地を除き日乾磚や土だけで塗り上げられる文字通りの泥の家が大部で、黃色である。又、棟を持つた屋根が稍々多くなる。そして、低窪地域では、葦を重ねて側壁を保護したり、壁の下部に防濕のために葦を横に並べたりされる。

人情、風貌の如きも、平原人の俤が明瞭になり、身長も高く、殊に天津商人、北京文化人は、華北平原人の一風格を示す。農夫も東部に比すれば、謂ゆる融通性が多く、言語も大分異つて來る。（完）（筆者は華北交通資業局員）

TRADE MARK REGD.
イチジク浣腸
疫痢と便秘に
お子供様病氣の應急手當に直ぐ役立つ
便秘やお子様の消化不良の應急手當には浣腸が第一です
お宅で簡易に完全な浣腸が出來ます
浣腸器不要
副作用無し
小人用
大人用
特大人用
御注意（近來同種品あり透明袋入イチジク印と御指定御求を乞ふ）
東京・大阪
イチジク製藥株式會社

東城記　その三

加藤新吉

北總布胡同十號は洋式建築である。その形式から判斷すれば民國初年のものであらう。謂はゞ支那の鹿鳴館時代の遺物といふところ。

西の胡同に面した部分は平屋根の平屋である。滿洲にはこの平屋根に泥を塗つただけの民家が多い。雨が降り出すと大急ぎで屋根に上つてその龜裂を塗り潰す。北京ではこれを平臺(ピンタイ)といひ安普請の物置や便所に用ゐる。こゝでも平屋根の部分は車庫、門房、厨房等であるが、このハイカラな設計者はルーフをもつことを意識したものらしく思はれる。またこの設計者は、かなり廣い敷地の大部分を庭にとつて、家は丁字路の西北角に押しつけて建てた。だからこの平屋は一寸の餘地も殘さずに北總布胡同に接してゐる。從つてまた、厨房や配膳室の高窓を開くと胡同の土埃が舞ひ込む。門房に寢てゐるボーイは芭蕉の「馬のしとする枕もと」の俳味を屢々滿喫する譯である。

この平屋の外觀は西洋の倉庫に似てゐる。そのセメント壁に赤ペンキの扉が二つ並んでゐる。或人の曰く、今度のお宅は自動車庫が二つもあるさうですね。冗談ではない、一つは門なのである。幸か不幸か自動車をもたないので、車庫は物置に使ひ、も一つの車庫みたいな門から出入してゐる。よく見ると門扉には安つぽいが洋風の裝飾模樣がある。同じ赤ペンキでも隣の赤ペンキとは位が違ふことを示したつもりらしい。

門を入ると穹窿を支へた柱廊まがひの造作、續いて植込のある玄關。些か西班牙住宅を思はせる手法である。壁に花瓦を貼り噴水を配して赤いゼラニウムの十鉢も並べると、夜などアンダルシア邊にゐるかの錯覺を起すかも知れない。

母屋は二階建。屋根は雨の多い地方に見るやうな急傾斜である。設計者は雨の多い地方に住んだことのある人かも知れない。尠くとも北京には類の少い屋根なので人目を惹く。五月、こゝへ移つて匆々一方の屋根瓦が一時になだれ落ちた時は頗る行人の目をみはらせたのみならず、その音が曉の闇を劈いて四隣の耳を聳てしめた。調べてみると、瓦止が充分にしてなくて殘の部分も何時なだれ落ちるか判らないといふので、急遽、雨季前に葺き替へて貰つた。

窓は何處の式か判然しないが、むやみに多い。すべて硝子窓。强い光線が二方三方から入り亂れるので、支那障子に使ふ厚手の高麗紙を内側に貼りつけた。これは光線と共に暑熱を遮るに役立つた。かうでもしないと室内が落付かないのみならず、鏡の箱に入れられた蝦蟇よろしく、たらりたらりと油汁を流す苦熱なのである。

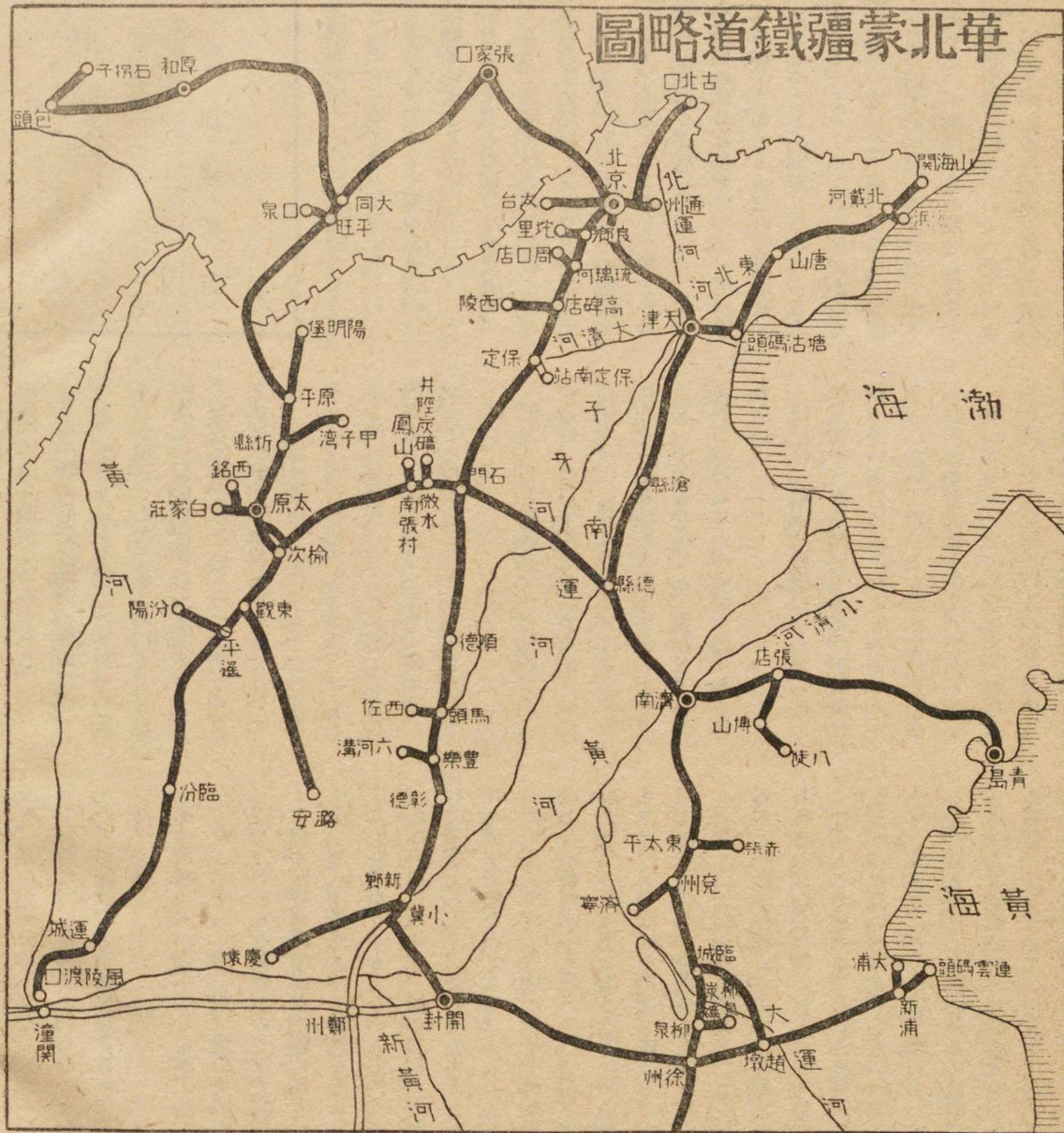
窓の戸はすべて内向に開く。外側は蠅よけの金網が年中固定されてゐる。乾燥地だから金網の腐る心配は少いやうなものゝ、網戸の内側へ降り込んだ雨は更に内側へ、室内へしたゝり落ちる。さういふ構造なのである。これをみると設計者が雨の多い地方に居ただらうといふ想像は覆されねばならぬ。

けだしこの家はニラ臭いが支那式でなく、バタ臭いが洋式でもない。男のやうな女、羊みたいな狼、鷄のまねする烏などと共に存在意義極めて薄弱である。たゞ家屋拂底の現在の北京である爲に、たまたまその存在を主張するだけのしろものである。

第一書房
今月の新刊

＊新秋十月、讀書に最も適はしい季節。思索の秋に絶好の良書は**岡田正三**氏譯『**プラトン全集**』全十二卷（各三圓五十錢）です。漸く第一卷出來。譯者苦心の本邦唯一の原語譯、平易明快な譯文によつて誰にでも此の大思想が把握されて、精神の豐饒な糧となりませう。それと同時に**鶴見祐輔**氏改譯『**プルターク英雄傳**』全四卷（各一圓五十錢）も、第三卷**義人の卷**愈々刊行。英雄の人間性を解明して古今獨步の價値を有する英雄傳その最高潮に達しました。

＊**山田靈林**氏著『**坐禪の書**』（一圓三十錢）は、坐禪の無限な内容を說いた最も新しい坐禪の書として好評を博して居ります。文學博士**松本文三郎**氏著『**達磨の研究**』（三圓）は特異なる名著です。今日までその實體を神祕の霧につつまれてゐた達磨は、此處に初めて人間として私たちの眼前に描かれたといへるでありませう。

＊文學博士**後藤末雄**氏著『**藝術の支那・科學の支那**』（一圓八十錢）も上梓されました。フランス文學專攻にして、科學精神に通曉せる著者の支那各地の紀行文ですが、單なる紀行でなく、その中に日支文化の諸問題を取扱つた點に他の追隨を許さぬものが在り、本誌讀者に特に一讀を戴きたい。

華北蒙疆鐵道

- 京山線（北京―山海關）
- 京古線（東便門―古北口）
- 京漢線（西便門―小冀）
- 津浦線（天津北站―蚌埠）
- 京包線（豐臺―包頭）
- 膠濟線（青島―濟南）
- 石德線（石門―德縣）
- 石太線（石門―太原）
- 同蒲線（大同―蒲州）
- 懷慶線（新鄉―懷慶）
- 隴海線（連雲碼頭―開封）

昭和十七年十月十五日印刷納本
昭和十七年十一月一日發行

十一月號
（每月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 古川一郎
（東京）（一〇四）
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替 東京六四二二三番
電話九段（33）三一四一一五番 三三四四番
會員登錄番號 一二一六五〇八番

一冊定價㊁三十錢（郵送料一錢五厘）
一ケ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

禁無斷轉載・檢閱濟

☆治療の要諦

化膿菌に對して劃期的治効を謳はれてゐるズルホンアミド劑の撰定に當つては其化學的純度高きものを採る事が治療の要諦であります。

☆ポレオン「日染」

ポレオン「日染」は二基ズルホンアミド劑の純正品にして、內服に依り左記諸疾患に對し的確に奏効するのが特徴であります。

適應症

化膿性 婦人科疾患
扁桃腺炎・丹毒
中耳炎・齒槽膿瘍
急・慢性 淋疾
其他あらゆる化膿性疾患

NISSEN

二基ズルホンアミド純正劑

ポレオン錠「日染」

包裝 二〇錠 一〇〇錠

製造發賣元 日本染料製造株式會社 大阪市此花區春日出町
一手販賣元 株式會社稻畑商店 大阪市南區順慶町二丁目

P—178

NISSEN

砒素驅黴劑

"日染"の新發賣！

今般弊社が完成したサビノールナトリウムは日本藥局方アルゼノベンゾールナトリウムに一致し其の規格に適合し然も嚴密なる効力試験並に臨床試験を經て發賣す。

時局下眞面目なる醫藥の要望さるゝ折柄自信を以て御薦めし得る「日染」の驅黴劑を御認識賜はり御愛用あらん事を誌上を以て懇願申上げ新發賣の御挨拶に代へる次第であります

一號 二號 三號 四號 五號 六號
各一管入及一〇管入

サビノールナトリウム

製造發賣元 日本染料製造株式會社 大阪市此花區春日出町
一手販賣元 株式會社稻畑商店 大阪市南區順慶町二丁目

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十七年十月十五日印刷納本　昭和十七年十一月一日發行（毎月一回一日發行）第四十二號
北支　定價三十錢

▲武田發賣品

ビタミンB1の不足は…

胃及び腸の活動力を低下せしめ、各筋肉の無力狀態を來し、食慾不振、便秘の原因となる。

食慾不振となれば假令ビタミンB1に富む食物を攝取しても、吸收が不良となり益々ビタミンB1缺乏の度を高め、消化器管は疲勞のため各種の胃腸疾患を惹起す。

かゝる場合高單位のビタミンB1の投與は先づ根本的に胃腸組織を賦活し、筋肉の緊張を調整してその過勞を恢復し、消化液の分泌を亢めて、食慾を旺盛ならしめ、榮養素の吸收を良好ならしめて所期の目的を達す。

【適應症】胃腸無力症、食慾不振、肺結核・肋膜炎時、妊・産・授乳時の榮養補給、各型脚氣、疲勞恢復等

V・B1含有量 一錠中〇・五ミリグラム

☆一〇〇錠　三〇〇錠

強力 メタボリン錠

製造發賣元 株式會社 武田長兵衛商店 大阪市東區道修町

2(1)664